
園黙示録 HIGH SCHOOL OF THE DEAD—仮面ライダーで転生者な主人公—

飛妖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園黙示録 HIGH SCHOOL OF THE DEAD
― 仮面ライダーで転生者な主人公 ―

【Nコード】

N2707M

【作者名】

飛妖

【あらすじ】

オリ主で仮面ライダーの主人公が学園黙示録の世界に行ったらという話

プロローグ（前書き）

主人公設定はネギま！の方で

プロローグ

「魔法先生ネギま！」副担任は仮面ライダーで転生者「の主人公」
有栖 蓮児」がネギま！の世界じゃなく学園黙示録の世界へ行っ
たら」

・
・
・
・
・
・
・

まあ

あれから転生して（魔法先生ネギま！）副担任は仮面ライダーで転
生者（参照！）この世界に来たけど

最初はディケイドライダーとかあって驚いた。

神様によると世界が世界だかららしいけど

普通だよ？この世界

何でディケイドが必要なのかな？

とか思っていた時期も私にありました。

これあれだ

この世界はあれだ！

学園黙示録HIGH SCHOOL OF THE DEADだ！

速攻死亡しないよね？

くっ目にゴミが！

第一話―何か・・・すごい、死亡フラグの世界だよねb y蓮児―

side―蓮児―

何でここが学園黙示録の世界か分かったって？

いや、転生した時にあった荷物に学生証があったから
この世界の学校に通う事になったんだよ

ディケイドであったその世界の役割みたいな奴かな

で、学校で同じクラスに【小室 孝】に【宮本 麗】とか【平野コ
ータ】とか【高城 沙耶】とか

いたんだよ！

最初は気のせいだろ！
とか軽く現実逃避してたけど

先輩に【毒島 冴子】とか先生に【鞠川 静香】とか・・・

うん、毒島先輩ってタブードーパントになれるのかなー？

現実逃避終了

まあ、もう来るべき日にそなえて取りあえず仲良くはなったよ！

部活は剣道部に入ったし委員会には保険委員だ！

毒島先輩は結構強かった・・・

ギリギリ勝てた・・・

見切りなかったら負けてるだろうね！

鞠川先生は・・・

うん、天然

まあ、いい

今はこの状況をどうにかせねば！

え？どんな状況って？

いやゝ

現在進行形でゾンビ天国になってて

原作通り

孝が教室に来て「逃げるぞ！」って言ったり麗さんを殴ったり（平手打ちね）のイベントが起きたよ

女の子を殴るのは止めた方がいいよ

んで永（【井豪 永】）と孝と麗で逃げて行った後に俺も教室から
出た。

・ ・ ・ ・ ・

放送があつてその放送してた人が喰われたのが分かった。

俺はライドブッカーを取り出し（何か出てこいとか念じたら手の中
に出てくるようになってた）

ソードモードにして廊下を歩く

「アアアア、ウウウウ・・・」

ゾンビ発見！

今助けてやるからな！

俺はひと思いにゾンビになった生徒を斬り裂く

ライドブツカーの切れ味はそらの名刀よりいいから
綺麗に斬り裂けた。

「成仏してくれよ」

さて、どうするかな・・・

ディケイドに変身したらすぐに一掃出来るけど
出来るだけ人にバレたくないしな

まあ、ソードモードにガンモードだけでも十分だな

かなり絶対絶命の時に変身しよう

ディケイドになれば噛まれても装甲だから大丈夫だしね。

そう思いながら俺は廊下を歩いていく

・ ・ ・ ・ ・

side—孝—

くそっ！

何なんだコイツら！

何でこんな事になったんだ

永もく奴ら＞にやられて・・・

麗も怯えてる

高城は大丈夫か？

蓮児も・・・

あいつは大丈夫か

あの毒島先輩に勝くらいだしな

side—冴子—

一体コレはどういう事だ？

死人が動くなど映画やアニメの世界に迷い込んでしまったか？

考えても仕方がない

今は鞠川先生もいるし安全な場所へ逃げるか

彼は大丈夫だろうか？

いや、私を倒した男だ心配ないだろう

だがもし、私に断りもなく死ねば許さないからな・・・蓮児

side—コーター

何でこんな事になったんだろう

今僕は高城さんと一緒に逃げてる

高城さんは頭がいいから色々思いついて教えてくれるから＜奴ら＞
を倒しやすいけど・・・

いや、弱音をはいちゃダメだな

今は安全な場所に逃げないと

まだ蓮児と銃の事を語りあいたいしね

・
・
・
・
・
・
・

side—蓮児—

げふう・・・

結構倒したゝ

頭を斬り落としたら直ぐに倒せるけど

凄い沸いてくるから疲れる・・・

えーと

原作だったら・・・

職員室あたりに行けばいいんだっけ？

あんまり覚えてないんだよな

原作・・・

あれって確か5巻まで出てたよな？

でも何か作者が違う漫画書いてて休載してなかった？

まあいいか・・・

よし！

職員室に行くか！

「くらえ！スラッシュ！（出ないけどね）」

ゾンビを斬り裂きながら

廊下を静かに走る！

・

・ ・ ・ ・

よし！

職員室は目の前だ！

でもゾンビはいる

大丈夫だろうけど職員室に入ったら行けないし斬るか

「ふははは！我はメシアなりー！
セイハットウハッ！」

何か悲しくなった。

そういやこの世界はゾンビの事<奴ら>って言ってたっけ？

まあ、俺はゾンビって呼ぶけどね！

さて、やっと職員室に入れる。

第二話―バス逃走!・・・―

side―冴子―

私達は何とか小室君、平野君達と出会い職員室へとたて籠もった
テレビでもコレが大事だと分かった

今から私達はバスで家族の無事を確かめに行く事にした。

だが・・・蓮児・・・君は無事なのか？

「ふははは!我はメシアなり!」
セイハットウハツ!」

・・・今のは、まさか・・・

side―蓮児―

ガラガラ・・・つと

行くぜ!

俺的言いたい事ランキング7位!

「俺、参上!」

しーん・・・

悲し、哀しい・・・

「ちょっと、あんた！

大声出してんじゃないわよ！」

あ、高城が反応してくれた

「大丈夫さ、そこらのゾンビは一掃したしな！」 「ゾンビって・・・」

何か孝が言っちゃったなみたいな顔してるよ

「やはり無事だったのだな蓮児」

「ふ、あの程度には負けぬ！」

「それはそうと蓮児くんそれ何？」

鞠川先生が俺の手に握ってる物に疑問を

ってしまった・・・

ライドブッカーをソードモードにしたままだった・・・

カチャカチャ

「ほ、本型のカード入れです」

「今明らかに剣だったろう？」

バレてら

「な、何でそんなの持ってたんの？」

コータが聞いてくる

「えーと、護身用さ！」

「護身用にしては刃が長くなかった？」

高城さん・・・

「・・・ちっ！この眼鏡がっ！」

「何よ！本当の事でしょ！？ていうか眼鏡を悪口みたいに言わないでよ！」

「まあ、蓮児が無事だったのだ、いいではないか」

冴子さんありがとう！

「そうだ、孝、麗、永は・・・
そうか、悪いな」

永の名前を出した瞬間二人の顔が悲しみに変わった・・・

「いいよ、私は大丈夫だから」

「すまないな

さて！とつとこの学校から出よう
人数多いしバスあたりに乗って行くか」

「私達も丁度そう言っていたんだ
では行くでしょうか」

・
・
・
・
・
・

さて、バスに行っている最中に3人ほど
仲間に加わった人達がいいます

あれだ原作で首にタオルかけてたから死んだ人達だな

「君、そのタオル、外してた方がいいぞ」

「え？あ、ああ、わかった」

これでこの人の死亡フラグは消えたかな？

・・・さて、玄関まできたけど・・・
中々・・・ゾンビが多いな・・・

「やたらといやがる」

「そうだなあ、まったく、どんな勢いだよ」

孝の言葉に俺は溜息をつく・・・
神様・・・なんでこんな世界なの？

『本当は別の世界に行くはずだったんですけど・・・てへっ』

神様ああああ！！！！

てへっじゃねえよおおお！！！！

まあいいか

『軽いですね』

そーいや神様の声が聞こえた気がする・・・

「見えてないから隠れる事なんて無いのに」

「じゃ、高城が証明してくれよ」

高城の言葉を孝が一蹴する

「たとえば高城君の説が正しいとしてもこの人数では静かに進む事などできん」

「ああ、そうだなあ、それにここで襲われたらどうしようもないしな」

「玄関を突き抜けるしかないのね」

冴子さんと俺の言葉で麗が覚悟を決めたようだな

「誰かが………確かめるしかあるまい」

冴子さんが呟く

ふむ、ここは、原作で孝が行ってたけどさすがに目の前で危ない真似はさせん！

「よし！俺が行くぞ」

……

おお、皆驚いてるねえ

「蓮児、どうしてだ？」

孝が聞いてくる。

そんなのお前……

「俺がかつこよくそれでいて華麗に・・・すいません、冗談です」

なんだろう？皆の目が超怖くなった・・・

「ふう、孝は麗を守ってやれよ」

麗は怯えてるしな

原作のヒロインだし

孝×麗だろ？

孝は俺の言葉であとは何も言わなくなったよ

「じゃあ行くかな」

「蓮児、私が「先にでようってのはなしの方向でね」む・・・」

「冴子さんも女の子なんだから

まあいざって時に控えててください」

「む、私がお、女の子・・・」

何か顔が赤くなってるね

うん、いつもクールな人がこんな感じになると可愛いよね。

「んじゃ行くぜ！」

そろゝと・・・

よしよし

気づいて無いな・・・

扉をゆっくり開けて・・・

よしよし

皆に手招きをしてっと

皆外に出て行く

ふう、なんとかあったかな？

・・・しまった！

ここはたしかあれだ！ガキイインって「ガキイイイイン！！！！」

なっちゃったよ！

うお！ゾンビ一斉に気付いた！

「皆走れえ！」

ドゥーン！！

シャキーン！

俺はすぐさまライドブッカードをソードモードにする。

近づいてくる奴らを斬り倒す！

第三話一変身！一（前書き）

変身します！

第三話―変身!―

side―蓮児―

俺達はバスまで走る!

近寄ってくるゾンビは斬り捨てて

何とかバスに乗り込む!

鞠川先生がバスのエンジンをかけようとしているが中々かからない

その間に俺と冴子さんと孝と麗がバスに近寄ってくるゾンビ共を潰す

「何時までも支えられんぞ!」

冴子さんが叫ぶ

「孝!麗と一緒にバスに乗れ!」

俺の言葉に孝は頷くと麗と一緒にバスへ乗る

それを見て俺と冴子さんも乗る

そこようやくバスのエンジンがかかった

「先生!早く出してください!」

あいつらは乗せたくないな

「まっってくれえ！」

ちくしょう来た！

その叫び声を聞き孝がドアを閉めようとしたのを止める

「誰だ？」

「3年A組の紫藤だな」

紫藤の後ろから数人の生徒も走ってくる

いや、なんどみても紫藤は胡散臭いなあ

原作でどんなやつか知ってるからすげえ嫌い

紫藤の名前が出たとたん、宮本の顔色が変わる。
歯を噛み締め、窓から紫藤を睨みつけている

「もう出せるわよ！」

「もう少し待ってください！」

「前にも来てる！集まりすぎると動けなくなるわ！」

「踏み潰せばいいじゃないですか！？」

「いや、このクルマじゃ、何人か踏んだら、横転するな」

「く……」

「あんな奴、助ける事ないわ！」

「そうだぞ、孝

麗の言うとおりあんなのは助けなくていいのだよ」

「な、何だよ？蓮児まで……？」

そう言いながらも紫藤達は駆け寄ってくる。

眼鏡の男子が転ぶ

だがその男子は原作と違い紫藤に助けを求めようとしたが手が紫藤の服を掴めなかった。

「ちっ！」

「蓮児！？」

俺はバスから降り

眼鏡の男子を助けに行く

こままじゃ間に合わない

しょうがない！

俺はライドブッカードをソードモードからガンモードへと変え、撃つ

「あ、あれって銃にもなるの!？」

誰かが驚いてるが今は眼鏡くんだ!

「大丈夫か!」

「あ、ああ!ありがとう」

「礼はいいから早くバスへ走れ!」

その言葉に眼鏡くんは頷き走りだす

俺も続こうとしたがゾンビ共に囲まれ動けない

ガンモードとソードモードを使い分けながらゾンビを蹴散らして行くがドンドン沸いてくる

「よし、全員のった!

蓮児!」

孝が俺の名前を呼ぶが無理だな!

「俺はいいから行けえ!」

うおっ!危なっ!

まだお前らの仲間にはならんぞ！

「何を言っているのだ蓮児！」

冴子さんが叫ぶが・・・

うん、無理！

「俺は大丈夫だから先に行くんだ！
みんなを頼むぞ冴子さん！」

「・・・くっ！」

絶対に死んではダメだぞ！蓮児！
鞠川先生！出してください！」

「でも！・・・いや、分かったわ」

そしてバスが発進する

「おらあ！」

一体を頭から斬り裂く

「ふう、行ったな・・・」

バスは無事校門から出て行ったのを見て俺は

「よし！一掃してすぐに追いついてやる！」

バックルを取り出し腰へ付ける

そして

「変身！」

カードを挿入する

【KAMEN RIDE!!】

【DECADE!!】

ディケイドへと変身する。

「くらえ！」

【ATTACK RIDE!!
BLAST!!】

ディケイドブラストを発動し

ゾンビを一掃する

おおぅ・・・

すげえ簡単に倒せる

「取りあえずコレで終わらせる」

俺は一枚のカードを取り出し

バックルへ挿入する

【FINAL ATTACK RIDE!! DE DE DE
DECADE!!】

ディメンションブラストでゾンビ共を一掃する。

あらかたのゾンビは倒したな・・・

よし！追いかけるか

そう思いカードを一枚取り出す

「これってやっぱアレを出すカードだよな？」

一枚のカード、それにはディケイドの愛用マシン【マシンディケイ
ダー】が描かれていた。
それを挿入し

【ATTACK RIDE!! MASINDECADE!!】

おお！あのオーロラっぽいのが出てマシンディケイダーが飛び出し
てきた！

よし！これで追いかけるぜ！

俺はマシンディケイダーに跨り発進させようとして

ああ、そうだ

「俺は通りすがりの仮面ライダーだ！覚えておけ！」

と、まだ襲ってくるゾンビ共に向かい言った。

第三話一変身！一（後書き）

携帯からだからマシンディケイダーのスペル違うかな

今更だが登場人物

【有栖 蓮児】（ありす れんじ）

名前が某ナムコとカプコンのクロスゲームの主人公に似ているが意図してやった訳ではない

神様の間違いで学園黙示録の世界へ転生した。

本来はネギま！の世界へ行くはずだった。

剣道部に入っており

冴子と勝負をして勝っている

委員会は保険委員で鞠川とはよく話す仲になっている

この中で唯一＜奴ら＞をゾンビと呼ぶ。

超ポジティブ

常にハイテンション

ちよいうっかり属性持ち

見切りが得意

神様の力でディケイドになれる

【小室 孝】

原作主人公。私立藤美学園高等部2年生。

頭に血が上りやすいところがある。

幼馴染の麗を守るため奮闘する。

また沙耶とも幼馴染である

蓮児とは友達

【宮本 麗】

原作ヒロイン。

孝の幼馴染で1歳年上だが、留年して学年は同じ。

槍術部に所属し、長柄物を振るってへ果敢に立ち向かう。

辛い状況下でヒステリックに振舞う事もあるが、孝のことは頼りにしている。

蓮児とは孝、永、共に友達である

【毒島 冴子】

3年生。

剣道部主将で、木刀などを手にと渡り合う。

2年生のときに全国大会で優勝した実力の持ち主。

凛とした強さと豊かな包容力を兼ね備え、一同の支えになる。

蓮児とは蓮児が剣道部へ入部した際に一戦交え
敗北

それ以来

蓮児とは名前を呼びあう仲になっている

自分は蓮児を呼び捨てなのに蓮児は冴子さんとさん付けする事に不満に思っている。

蓮児に好意を抱いている節がある。

ぶっちゃけ、この小説のヒロイン

【平野コータ】

孝の同級生。

沙耶に付き従う肥満のミリタリーオタク。

学園生活ではそのそぶりを見せなかったが、実はアメリカの民間軍事会社（PMC）ブラックウォーター社（実在するPMCである）で銃器の取り扱い訓練を一ヶ月受けており、その知識と射撃技術は一行が生き残るために必要不可欠なものとなる。

蓮児とは蓮児がたまたま聞いてきた銃の話から仲良くなり親友になる。

【高城 沙耶】

孝の同級生で、麗と同じ小学校時代の幼馴染。

高飛車な少女。

天才を自認し、豊富な知識と高い分析能力を誇る。

ただし身体的にはごく普通の女学生であり、荒事も苦手。

ツインテールの眼鏡っ子。

蓮児とは喧嘩ばかりする（蓮児はただからかうだけ、沙耶は本気でキレル）が仲が悪いわけではない

【鞠川 静香】

藤美学園の校医。

頼りないがスタイル抜群の美人。

天然。

唯一の運転免許取得者として車の運転に活躍。

大学病院から臨時の校医として学園に派遣されており、非常事態であっても学園から可能な限りの量の医薬品を持ち出そうとするなど、医者として行動する。

蓮児とは蓮児が保険委員なため良く話している

天然なところを蓮児が補っている。

蓮児に意外にも好意を寄せているようだがまだわからない。

もしかすれば第二ヒロイン。

第四話ーバスの中でー

これまでの仮面ライダーディケイド（偽）は！

「ここって学園黙示録の世界か？」

「うわあああ！何なんだよコレ！」

『間違えちゃった、てへっ』

「神様ああああ！！」

「あんな奴助ける事ないわ！」

「俺はいいから先に行けえ！」

「変身！」

【KAMEN RIDE!!】

【DECADE!!】

「俺は、通りすがりの仮面ライダーだ！覚えておけ！」

ズシャシャシャシャ！
シャキーン！

「何か今あらすじのようなあらすじじゃないようなのなかった？」

・ ・ ・ ・ ・

今の蓮児は！

「Ride the Wind!

駆け抜けろ」

何か歌っていた。

バイクに乗りながら

・ ・ ・ ・ ・

side—蓮児—

取りあえず学園から脱出できたな

さっさとみんなに追いつこう

やっぱ紫藤にはブラスト打ち込まないと気がすまんぜ

いや、嘘だけど

てか、初めてバイク（マシンデイクイダーはビックスクーターか？）
乗ったけど意外に乗れるな・・・

クラインの壺から無尽蔵にエネルギーが送られるからガソリンとか
入れなくてもいいんだよねえ

ちなみに今は変身解いてるよ

変身解いたらデイクイダーも消えるかもって心配したが大丈夫だったよ

・
・
・
・
・
・

ちよいと数分前

side—冴子—

蓮児を置き去りにして私達は学園から脱出した。
無事でいてくれよ
蓮児・・・

「助かりました。リーダーは毒島さんですか？」

「そんなものはいない。逃げる為に協力し合っただけだ」

「それはいけませんね・・・」

リーダーがいない。

この事実、紫藤の口元がニヤリと醜く曲がった

・・・こいつは・・・

宮本君は小室君に「紫藤を助けた事、絶対に後悔するわよ」と怒りの表情で訴えている

小室君は首を傾げているが

・
・
・
・
・

町はすでに地獄と化していた。

学校を出てから約数分後、車内は沈黙が支配していた。

無理もないだろう

つい先ほどまでは世界は壊れていなかったのだから

バスは既に学校を離れ、国道を走っている。

しかし、遂にそんな空気に耐え切れずに生徒の一人が席を立ち、声を荒げた。

「なんで俺たちまで小室たちに付き合わなきゃならないんだ？ お前ら勝手に街に戻るだけって決めただけじゃなか！」

「そうだよ・・・このまま進んでも危険なだけだよ！どこかに立て籠もったほうが・・・」

髪を金に染めたいかにも不良そうな生徒が声を上げる

それに続き他の生徒からも不満の声が上がる

「もうっ！いいかげんにしてよ！こんなじゃ運転なんかできない！」

外は、自動車やバイクが横転したりして、まともに運転できる状況ではない。

そんな空気に集中して運転できない静香先生が一旦バスを止め、声を上げて注意した。

その言葉で不良の生徒達はバツが悪そうな顔になり黙った

小室君はこの騒動の原因の男子を睨みつけている

「んだよ！やろうってのか！？」

小室君の視線に気づいた男子が小室君を睨みつける。

「なら、君はどうしたいんだ？」

私の言葉に皆の視線が男子に集まる。

「う・・・こいつが気に入くわねえんだよ！」

ふう、いい歳をして何を幼稚な事を・・・

「なんなんだよ！偉そうにしやがって」

「なにがだよ？俺がいつ、お前に何を言ったよ？」

「てめえっ！」

男子が小室君に殴りかかる

その時

「がっ！」 宮本君の得物が男子生徒に突き刺さった

男子生徒は苦しそうにうめき声を上げて倒れこんだ。

「あなた、最低ね」

宮本君はそう男子生徒に言い放つ

・・・中々見事な動きだな

宮本君の行動で車内に再び沈黙がやどった

パチパチパチパチ

沈黙を破ったのは紫藤の拍手

「実にお見事！すばらしいチームワークです・・・宮本さん、小室くん」

嫌みったらしい顔で紫藤が言う

「しかし・・・」

小室君と紫藤の視線が交差する。

。流石に小室君も紫藤の不穏な空気に気がついたのか表情を歪める

間違はなくアレは助けたのを後悔している顔だ。「こうして争いが起こるのは、私の意見の証明にもなっています。だから、リーダーが必要なのですよ」

「で、候補者は一人ってワケ？」

「私は教師ですよ？高城さん。
そして皆さんは学生です……それだけでも、資格の有無ははっきりしています」

やはり、こう言う行動でるか……

「どうですか……皆さん？私なら、問題など起きないように手を打てますよ？」

パチパチパチパチパチパチ！

紫藤の言葉に生徒達が拍手をする

「……というわけで、多数決で、私がリーダーということになりました」

紫藤は礼をすると、その背に拍手を受けながら、自分の思惑通りにいったという満足そうな表情で自分がリーダーである事を宣言した。

「………のよ」

そんな中、宮本君が何かを言った。

「はい？どうしました？宮本さん？」

「だから言ったのよ！

こんな奴助けなくていいって！

こんな奴を助けなければ……

蓮児は……」

その言葉で小室君は顔をしかめる

「有栖君の犠牲は無駄な事ではありませんでした。彼があそこでアレを止めていなければ私達も助からなかったかもしれません」

と紫藤は言う

・・・ふむ？

「君達、何故、蓮児はもう死んだと思っている？」
私の言葉に宮本君達が顔を上げる

「だ、だって、あんなに沢山＜奴ら＞がいたんじや
きつと・・・」

「蓮児は私達に言った。大丈夫だと、すぐに追いかけると
私はその言葉を信じる」

「そうよね、あいつが簡単にくたばる訳ないもの」

高城君が言う

「ああ、そうだ、彼は私を倒した男だぞ？
そう簡単にはやられやしないさ」

そうだろう？

蓮児・・・

第五話一その頃の蓮児は一（前書き）

主人公がマイペース過ぎる？

第五話―その頃の蓮児は―

side―蓮児―

「せいっ！とう！おりゃあああ！！」

え？何をしてるんだって？

ウィリーとかしてゾンビを蹴散らしてます

ビックスクーターでウィリーって・・・

もしかして凄い？

でも重い・・・

一回デイクエイドになってデイクイダーをオートバジンとかにしようかなあ

デイクイダーじゃ

道通り憎いしなあ

乗り物が横転してたりゾンビがうようよいるから走り憎いったらあ
りゃしない

だから中々みんなのバスに追いつけない事実

本来は孝と麗が一時離脱する所あたりに合流しようと思ってたんだけどなあ・・・

さて、どうするかな・・・

橋の方にいった冴子さん達と合流するか

一回家に帰るか・・・

何故家に帰るかって？

いや～

ちょっと家に置いて来たある【道具】があるんだよね

ふむ、橋いつでもすでに冴子さん達がいなかったら虚しいし・・・

うん！

家に一旦戻るか！

・
・
・

・ ・ ・
キングクリムゾン！

言ってみたかった。

取りあえず
四苦八苦しながら（それでもディケイダーからは降りずに）家にたどり着いたよ

ちなみに俺の家はアパートです

転生した時にあった財布に結構金が入ってたからマンションにでも住もうかと思ったけど

金が勿体ないからやめた。

住めればいいしね

・ ・ ・

さて、アパートにはゾンビはいなかったな

皆、逃げれたか、あるいは・・・

それじゃアレを持っていくか

ゴソゴソ・・・

あったあった・・・

俺が手にとったのは

黒とマゼンタ色でPSPのような・・・

うん、ぶっちゃけ

ケータツチ

何で持ってるかと言うと転生した時ディケドライバーと一緒にあったんだよ

まあ使う事ないだろうって思って置いてあったけど

ゾンビ襲来を見てやっぱり持っという方がいいかなと

空前絶後の数のゾンビに囲まれたりとか
筋骨隆々で防弾コート着てロケラン持ってる奴とかに囲まれたりとか
そんなときがあればオールライダーとかで蹴散らせたら助かるだろ

うし

さて、目当ての物も取ったしみんなと合流しましょうか。

・・・先生の友達の家ってどこにあるんだっけ？
どんな家かは分かってるけど・・・

ふゝむ・・・？

と、取りあえず住宅街へ！

番外くある日の風景く（前書き）

番外編でさあ！

番外くある日の風景く

くゾンビが襲来する少し前の蓮児の生活風景く

side―蓮児―

ういく・・・

今日もゾンビはまだ来ないねえく

原作読んでるけど・・・

ぶっちゃけ何月何日にゾンビがこの学園に来たのか知らんからなあ・

・

まあ今日もがんばりましょく

・

・

・

・

・

・

・

く孝、麗、永の場合く

「ようろう」

「ん？蓮児、何か用か？」

孝、麗、永が揃っていたので声をかける

「いや、別に用ってわけじゃないけど
何となく声をかけてみた!」

「なんだそりゃ?」

永が何か呆れた顔をしゃがってるぜい!

「用が無くても声をかける・・・
それが俺だ!」

「蓮児・・・」

うわ! 麗が何か哀れな視線を向けてる!

「畜生・・・そんな目で俺を見るなあああ!!!!」

「え? おい! 蓮児!？」

俺はその場から逃走した・・・

「何なんだあいつ・・・」

「ま、いつもああだしな」

「少し前に転校して来たのにもうずっと前から一緒にいるような錯覚があるわね」

・
・
・
・
・

・
　　＼高城の場合＼

「やぁ高城」

「・・・何よ？」

おおぅ、コイツいつもツンツンしてるね

デレ期はいつだ!？

「何か今変なこと考えてなかった？」

「イイエ、ソンナノコトハ
ゴザイマセンヨ？」

「何でカタコトなの・・・
で？何の用よ？」

「ん？いや用なんてないですよ？」

あ、何かプルプルしだした・・・

「あ・ん・た・ねえゝ!!！」

「正直スマンかった！」
ふっ!さらばだ!

「まったく、いつもいつも・・・

ま、そんな所があいつのいいところなんだろうけど」

・ ・ ・ ・ ・

「コータの場合」

「コータ」

「ん？蓮児じゃないか
どうしたの？」

「いや、今日はこの銃の事を教えて欲しくて」

俺はコータに携帯の画像を見せる

瞬間コータの目がキラリと変わった

「その銃はね

いいかい？ペラペラペラペラペラペラペラペラペラ」

銃の事になると凄いな！

コータと銃の話してると面白いんだよねえ」

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・
　　＼冴子さんの場合＼

「おや、蓮児じゃないか」

「あ、ども＼冴子さん」

あ、何か冴子さんがため息を・・・

「いつも言っているだろう？」

私の事は冴子でいいと」

「いや、冴子先輩から冴子さんにしただけでも俺は偉いと思う・・・」

それに俺は後輩、冴子さんは先輩ですしね」

「そんな事、気にする事ないだろう？」

「冴子さん、知らないかも知れませんが冴子さんにはファンクラブ的なのがあるんですよ？」

そんな人達がつい最近転校してきた奴が冴子さんを呼び捨てにしてるのを見て

ほうっておくと思いますか？」

「別に気にする事ないだろうに」

「学校の中ではねえ」

せめて外なら・・・」

「外でならいいのか・・・」

そうか、そうか・・・」

何だろう？

俺の第六感がここは一時退却しろと告げている・・・

ふっ！ならば本能に従う！

見よっ！俺のカードを使わずにやるインビジブルを！

『アタックライド！

インビジボウ・・・』（出来るだけ似せた声で）

「ならば蓮児、今日の放課後・・・ってどこに行った！蓮児！？」

悪いな冴子さん！

もう俺はいない！

「私に気づかせず逃げるとは・・・
やはり私の・・・」

何か赤くなる冴子さんであった。

・
・
・
・
・
・

（鞠川先生の場合）

「いつも、ごめんねえ？蓮児君」

「いやいや」

俺、保険委員だし大丈夫ですよ」

ところでこの薬品の数が気になるな・・・

まあいいか！

今日は鞠川先生に聞きたい事があるんだよね！

「ところで鞠川先生の胸って何カップあるんですのん？」

セクハラとか言うな！

気になるだろう！

「ええ！？

な、何？いきなり？」

「いや、何、ちよいと気になりました」

「え、え」とね

108のJ・・・だよ」

なん・・・だと？

答えてくれたのも驚きだか108のJだと・・・？

でかい・・・

「マジすか・・・

いや、何というかありがとうございます」

「う、うん」

・
・
・
・
・

side out

とまあ

こんな感じでした」

第六話―その頃の蓮児はpart 2―（前書き）

やっぱりマイペースすぎる？

今回は短いです

あとなんかノリで書いちゃいました

なんか蓮児が色々言ってますが気にしない方向で・・・w

第六話―その頃の蓮児はpart2―

side―蓮児―

うゝん

結構日が暮れてきたぜ！

これは明らかにアレだな

皆、紫藤組の奴らから離脱してるなあゝ

まあ、元々そうだと思ったから住宅街にいつて先生の友達の家を探してるんだけどね！

あのイベント（イベントっていつちやダメか・・・）が起きるまでには何とか合流したいな

・・・・・・どうでもいいけど・・・夜のゾンビはアレだな
恐怖以外の何者でもないよな・・・

その内さあ

ゾンビ犬とか脳がむき出しで舌が超長い天井とか這える奴だとか出てきたりしないだろうな・・・？

例えば・・・

湖で水の中に銃を発砲してたらサンショウオに食われたりとか・・・

・・・ゾンビの頭撃ち飛ばしたらどるりゆりゆりゆりゆ！って
寄生虫が出てきたりとか・・・

・・・無いな・・・

いや無いですよ？

くっ原作は休載してて完結とかはしてないからそんなんが出てこな
いって保障はないしな・・・

出てきてもディケイドになれば余裕だけど・・・
そんな特殊な攻撃とかする奴出てきたら皆を守れんぞ・・・

まあ警官のゾンビが銃を使わないだけ大分助かってるけどな・・・

あとゾンビがダッシュしてこないだけマシだな。

そっういや原作のキャラ・・・

孝や冴子さん達ってゾンビを倒しながら進んでかなり強いけど

俺たちのほかにそんな風に超強い人とかいるのかねえ？

・・・高城のお父さん？

うん、すげえ強いだろうね

もっとう・・・

テンガロンハット被っててビキニでポン刀一つで戦ってるお姉ちゃんとか・・・

うん、絶対ないな

何か妄想しまくってたけど

今俺は、車物色中・・・

何でって？

いや、住宅街に向けて走ってたなら

自衛隊の車（迷彩の）っぽいのが転がってたから武器ないかな、と

俺はライドブッカーがあるから別に武器はいらないけど

一応持っておいた方がいいかなと

青年物色中．．．．

「お、マシンガンののみつけた」

青年物色中．．．．

「おお？マグナム？何で？

まあいいか

これはいいな持っておこう」

青年物色中．．．．

「え、エボニー&アイボリー．．．」

青年物色中．．．．

「ガンブレード．．．．」

青年物色中．．．．

「ディ、ディエン（この先はスキマ送りにされました。）」

．
．
．
．
．
．

・

うん、あの車はきつと人々の夢と希望が詰まっていたんだな・・・

なのでマグナムと弾だけを貰っておきました・・・

残りは俺みたいはこの車を見つけた人の物ってことで・・・

いや、そろそろ本気で日が暮れる・・・

さっさと行かないと！

第七話 合流！ ―（前書き）

やつとこさ

合流！

第七話―合流!―

知らない人がいるかもしれないから書く蓮児の特徴的な何か

髪の色…白（生まれつきです）

特技…見切り（かなりレベルの高い見切り）

属性…ちよいとうっかり属性（アカイアクマ程ではない）

以上

（以下本編）

side―蓮児―

ハッ!?

今この世界とかなり似た世界に俺と同じ仮面ライダーになれる転生者が生まれたような気が・・・

何、言ってるんだ俺・・・

さて・・・

ゾンビ共を轢き潰したりしながら家を探してるが・・・

お！

あのゾンビ共は！

・ ・ ・ ・ ・

side—孝—

今俺達は鞠川先生の友達の家にいる

麗達はみんなで風呂に入ってる

・・・騒ぎすぎだろ・・・

まあ、俺はコートと一緒に武器が入ってると思うロッカーを開けないと・・・

・・・蓮児は本当に無事なんだろうか？

・ ・ ・ ・ ・

・
side—冴子—

ふう・・・

蓮児・・・

君は今どこにいるんだ？
大丈夫なのか？

「何よ？ため息何て吐いて」

高城君が私に聞いてくる
ふむ、声に出ていたか

「いや、少しな」

「どうせ蓮児の事を考えてたんでしょ？」

「バレていたか・・・」

「そりゃあね

あんた、蓮児にベタ惚れだもの」

「な！？何を！？」

た、高城君！

き、君は一体何を言っているのだ！

「あんた見てれば誰だって分かるわよ」

「む・・・」

「まあ、いいんじゃない？」

「あいつは変ではあるけど悪い奴じゃないし」

「うん・・・」

「そんな心配しなくたってその内バカみたいなテンションで出てくるわよ」

「ああ・・・」

「そうだな、ありがとう高城君」

「だが・・・」

「後輩の高城君に慰められると言うのは・・・何か・・・」

「シャー」

「ひゃあああああ!？」

「水をかけてみた」

「な、何すんのよ!？」

「私が折角・・・」

「ふ、油断大敵だな」

「ん? 高城君が洗面器に水を・・・まさか・・・」

「こっちだって!」

ザアアア・・・

「ん、く、ふう・・・ん、んん！
フー」

危なかった・・・

「くっ！大人の余裕を・・・！」

ふっふっふ！

まだまだだな、高城君

・
・
・
・
・
・

風呂から上がり

各自のんびりしている。

私はパンツ一枚にエプロン姿・・・

服がなかったからこの様な格好だが・・・

どうせなら蓮児に見・・・ゴホン！
何でもないぞ

・
・
・
・

・
side 一孝一

ベランダに出て外を見るとここに来た時よりも＜奴ら＞が増えていた。

その中に人がいたが奴らに襲われた

とっさに俺は撃ちそうになったがコータに止められた。

「音に気づかれたら大変だよ」

・・・くそ・・・！

こんな時

蓮児だったら静止を振り切って撃ちそうだな・・・

・ ・ ・ ・ ・

俺達はそろそろこの家を出る事にした。

ハマーを使わせてもらい逃げる。

「！あれ！」

そんな中コータが何かに気づいた

コータの視線の先には小さな女の子が＜奴ら＞に襲われそうになっていた

「ヒヤッハー！」

コータが＜奴ら＞の一体を撃ち抜く

俺はあの子を助けに・・・！？

あれは・・・！？

ブロロロ・・・

あれは・・・バイク？

一体誰が・・・？

・
・
・
・
・
・

side—蓮児—

あの大量のゾンビ共は！

あれか！

少女救出イベントかつ！

その先の家にはハマーとかあるし

よし！合流だな！

まあ、その前に！

少女を助けるか！

「おらあああああ！！！」

ズギヤギヤギヤ！！！！！！

ドゴン！！！！！！

デイケイダーで奴らに突進し、轢き飛ばす！

「蓮児！？」

お、あそこに見えるのは冴子さんか

「俺、再び参上！！」

行くぜ行くぜ行くぜ！！」

ライドブッカーをガンモードにし

先ほど手に入れたマグナムとの二丁でゾンビを蹴散らしながら少女の元へ行く！

ライドブッカーって一発が散弾みたいに出たりするからかなり使えるな

「大丈夫か！」

俺は少女をすぐさま背負い

原作の孝のようにヘイに登る

すまんディケイダー！

お前は乗り捨てる！

まあすぐ呼べるからいいよね

「ふはははは！！届かんだろう！」

高笑いしながらライドブッカーを撃ちまくる！

・
・
・
・
・
・

side—冴子—

あの＜奴ら＞に突っ込んで行くバイクは・・・？

「おらああああ！！！」

そのまま＜奴ら＞を吹き飛ばした。

あれは、あの声は、まさか！

「蓮児！？」

「俺、再び参上!!
行くぜ行くぜ行くぜ!!」

やはり、君なのだな・・・
無事で本当に良かった・・・

ぬ、喜んでいる場合ではなかったな

あのままではマズい
蓮児を助けに行かなければ!

「鞠川校医!」

「え、ええ!!」

・
・
・
・
・
・

私達は車に荷物を入れ発進させる

今行くぞ、蓮児!

・
・
・
・
・

side—蓮児—

「ふむ、ふむ、希里ありす、ありすちゃんかゝなるほど、俺と君でダブルありすだな」

「お兄ちゃんの名前は？」

「俺か？俺は有栖 蓮児だ
レン君って呼んでね！」

注意下はゾンビ天国です！

ヘイを歩きながらありすちゃんと喋っております！

「うん、わかったー」

・・・・・・はて？

何か忘れてるような？

「れ、レン君・・・」

「ん？どうした？」

「あ、あのね、おしっこ・・・」

・・・・・・忘れてたのこれか・・・

そーいやそうだったな

こんなんあったな・・・

「我慢は？」

「無理かも・・・」

やっぱり

「ならやっちゃいなさい！お兄ちゃんが許可するから！」

「い、いいの？」

「OK！ばっちこい！」

少女によろ中・・・

ふっ！

生温かいぜ！

ズガアアン！

「乗れ！蓮児！」

おし！

来たな！

「ヨンキュー！冴子さん！」

俺はヘイから車へと飛び乗った。

「じゃあ、行くわよ！
しっかり掴まってて！」

「おっしやあ！」

出発！」

車はゾンビ共を撒き発進した。

番外編ーファイナルカメンライドー（前書き）

番外

ゾンビ共が襲来するちょい前の話

蓮児が変身しまくりますが

何か最後の方の変身がアレです（え

番外編—ファイナルカメンライド—

side—蓮児—

ふむ・・・

来るべき日にそなえて

今日は変身してみよう！

あの神様、実はおっちょこちよいみただし

変身出来なかったら悲し過ぎる・・・

・
・
・
・
・
・
よし！

人は見当たらないな！

ここで変身してみましよう！

バックルを腰につけて

「変身！」

【KAMEN RIDE!!】

【DECADE!!】

おお！ちゃんと変身できた！

大丈夫そうだな

でも、まあ一応他もやりますか！

「見ててください！
俺の、変身！」

【KAMEN RIDE!!】

【KUGA!!】

おお、リントの戦士だよ！
クウキじゃないよクウガだよ！

よし、
次は・・・

【KAMEN RIDE!!】

【AGITO!!】

「自分の居場所を狭くしているのは自分自身なんだ!」

なんてね

アギトだよ

かつこいいよ (某軽音部のギターの天然娘風に)

よし、次は・・・

「約束する。

俺は、人を守るためだけに変身する!」

【KAMEN RIDE!!】

【RYUKI!!】

よし!

龍騎だ!

俺的にかなり好きなライダー!

ドラグレッダー格好いいよな・・・

よし

次は・・・

「俺はもう迷わない。

迷ってる内に人が死ぬなら。

戦う事が罪なら、俺が背負ってやる!」

【K A M E N R I D E ! !】

【F A I Z ! !】

ファイズ! 555! Φ!

実はサメがモチーフのファイズ!

よし次は・・・

【K A M E N R I D E ! !】

【B L A D E ! !】

「オンドウルラギッタンディスクー!!」

ブレイドの剣埼一真はオンドウル星の王子らしいよ?

よし、次

【K A M E N R I D E ! !】

【H I B I K I ! !】

「鍛えてますから」

シュッ！つとね

何か頭の上でシュッとするポーズ格好いいよね

よし次・・・

【KAMEN RIDE!!】

【KABUTO!!】

「おばあちゃんが言っていた・・・
人は人を愛すると弱くなる・・・
けど、恥ずかしがることはない。
それは本当の弱さじゃないから。ってな」

カブトは格好いいよね～
ライダーキック回し蹴りだもんね

よし次！

【KAMEN RIDE!!】

【DEN-O!!】

「俺、参上！」

電王はコメディ色強かったよね

かなり人気だったようで今だに映画放映されてるよね

どうせなら、新ライダーをまた電王にすりゃいいんだ

無理か・・・

よし次

【KAMEN RIDE!!】

【KIVA!!】

「キバって行くぜ！」

キバって・・・

ゴメン、あんまり・・・何か昼メロっぽい要素入れたのは失敗だと思う

753は面白かったな！

よし！次！

【KAMEN RIDE!!】

【DABURU!!】

「さあ、お前の罪を数えろ！」

.....あるえ？！

何でWのカードあんの！？

あれえ！？

【FORM RIDE！！】

【DABURU HEAT METAL！！】

何でええええ！？

くっ！

まあ考えても仕方ない！

力が増えて良かったじゃないか！

なら、あれもか？

よし！やってみよう！

シャツ！

フォン・・・

【KUGA！！ AGITO！！ RYUKI！！ FAIZ！！
BLADE！！ HIBIKI！！ KABUTO！！ DE
NO！！ KIVA！！】

【FINAL KAMEN RIDE!!】
【DECADE!!】

コンプリートフォーム!!
ふんふん、まあ当たり前にヒストリーオーナメントには9人のライダーのカード・・・
みんな最終フォームのカードじゃん・・・
最強コンプリートフォームかよ!

まあいいや!
よし!やってみるか・・・

ライドブッカードからWのカードを取り出し

バックルに挿入する

【DABURU KAMEN RIDE XTREME!!】

ケータッチと同じような電子音がっ!

エクストリームフォームでて来たあ!!

マジか・・・

すげえ・・・

ディケイド、マジ何者だよ・・・

・ ・ ・ ・ ・

その後

クウガと電王もやったら

クウガはライジングアルティメット

電王は超クライマックスが出たよ

確実に更新されとるがな・・・

まあいいか！

よし！今日は帰るぜ！

・ ・ ・ ・ ・

s i d e — ? ? ? —

今のは・・・？

蓮児？

あの姿は一体・・・？

番外編一ファイナルカメンライドー（後書き）

当初からの目的で

実はある人にバレてたフラグがあっただりしたのですよ！

ふはははは！！（あ

第八話 一車の中で一（前書き）

意外にWにカメンライド出来る事にツッコまれんかった・・・

第八話 一車の中で

合流直後の車内

side 一蓮兎一

ハッ!?

何かこと似た別の世界のライダー転生者が俺より死亡フラグを折ってる気がする!

また何言ってるんだ、俺

たまに電波受信する・・・

俺は今車の中にいるぜ!

あ、ジークもちゃんと拾ってるよ

さて、みんなと合流して今から多分、高城の家に行くんだらうね

高城の親父さん・・・か・・・

明らかに高城ってお母さん似だよな・・・

親父さん、顔濃すぎだろ・・・

「本当に無事でよかったぞ、蓮児」

考えてたら冴子さんに心配されてた！

「うん、本当に無事でよかった・・・俺・・・。考えてみたら「先に行け」とか待ち合わせ場所決めてないとか・・・死亡フラグが半端なかった・・・」

マジでディケイドの力なかったら今頃あゝうゝ言ってたかも知れん・・・
おのれディケイド！

「でもよく俺達の場所が分かったな？」

孝が聞いてくる

「うん、何だろう

何かこう・・・神の力みたいなんで分かったんだよ」

原作知ってましたとか言ったらそこで試合終了だぜ

「何だそれ・・・」

「何だそれ、か

俺的には今の冴子さんの格好の方が何だそれだぞ」

何でパンツ一丁エプロンなの？

いや、確かに原作でもあったけど
せめて服着ようぜ

でないと連写で写真を撮りまくりそうだ

もしくはエプロンを剥ぐ

「いや、まあ、冴子さんはそれだからこそ冴子さんって訳か・・・」

「む、どういう事だそれは？」

「あっはっはっは！」

うん、でもここにいる
性・・・んん！！

青少年達には刺激が強すぎるので服を着る事を提案する！」

俺は穴が開くくらいガン見した・・・

いや、冗談です、はい

「君がそういうなら着るとしよう

すまないが小室君、平野君、向こうを向いていてくれるか？」

「あ、はい、わかりました」

・・・・・・俺は？

「お、俺は？」

「き、君は見たいのなら見ても構わない、ぞ？」

「……なん……やて……?」

何という事だ、冴子さんもディケイドに破壊されてしまった……

おのれディケイドオオ!!

あ、俺か

(偽) فقط

まあ、あれだよ

きつと冴子さんなりのご褒美だよ

いや、ご褒美で

何言ってるんだ俺

え？フラグ立ってる？
誰に？

俺と冴子さんに？

そんな訳ないジャマイカ

例えありすちゃんが小さな旗を上げてたとしてもだ！

その旗どっから出したのよ!!

「はあ、何やってんだか」

高城さ〜ん
呆れないで〜

「うん、まあ

実はもう十分ガン見しましたから
服を着てくださいね
風邪引いたら大変ですしね」

取りあえず俺の脳内フォルダに永久保存しておこう

「わ、分かった」

ふっ・・・

着替え中もさり気なく見てたら冴子さんとありすちゃん以外の女性
陣に凄い目でみられたので止めました。

先生なんてミラー越しだよ

「そう言えば俺とありすちゃんとでダブルアリスが結成されたぜ
さあ、お前の罪を数えろ」

「数えろ〜!」

あ、何かのつてくれた。

「何だよ、それ・・・」

孝が苦笑いしてるな

うん、その気持ちはよくわかるよ

てかありすちゃんかもし俺みたいに名字がアリスの人と結婚したら・
・・
アリスありす・・・

何かダメだな・・・

「それはそうと蓮児」

「うん？どうしたコータ」

「君の持つてる武器を見せてくれない？」

武器、ライドブッカードかマグナム？

まあライドブッカードでしょうね

「ライドブッカードの事かね？
これか？」

「それぞれ」

「別にいいよ、ほい」

コータにライドブッカードを渡した瞬間

コータがライドブッカードをこっちに向け発砲

って事はないだろうしね

「普段はカード入れて戦う時に剣や銃になるのか・・・
これ、弾はどうやって入れるの？」

・・・

「知らん」

「知らんって・・・」

「弾は、む、無限？」

いや、俺自身よくわからんし」

クラインの壺がどうたらこうたら？

「弾が尽きないなんて殆ど最高じゃないか・・・」

「いや、ほら、今外がゾンビだらけって言う摩訶不思議アドベンチャーなんだから無限弾の銃くらい不思議じゃないって！」

まあ変身したら不思議じゃ済まされんがな

「うーん・・・

不思議な事もあるんだね」

あ、何か誤魔化せた？

うん、誤魔化せた事にしよう！

「君みたいな不思議な存在もいるんだ
そのくらい何て事ないさ」

俺が不思議・・・
初めて言われた

まあデイクイドに変身出来るとか十分不思議か！

「それはそうと冴子さん（蓮児）」

おや、言葉がかぶった

「ぬ？何すか？冴子さん」

「君こそ、何だ？」

「いや、俺は別に大したことじゃないから冴子さんどうぞ」

ただ髪くくったんすねって言おうとしただけでしたとき

「そうか、いや何、いい加減私を冴子と呼んではくれないか？」

ああ、前から言ってたね
ふむ・・・そうか・・・

「じゃあ、冴子」

「っ！？」

い、いきなりとは・・・」

「いやあ、もう学校クソも何も無くなっちゃったしねえやれやれだぜ」

「そ、そうか」

う、うむ、ありがとう蓮児」

「何故にお礼を・・・
まあいいか」

「お前は凄いな、蓮児」
ん？、孝さん、どうしたんだ？

ふっ、原作でフラグを一杯たててるお前の方が凄いぜ

上条さんほどじゃないがな！

本当に何言ってるんだ、俺

冴子は何か赤くなってるしコートはまだライドブッカーいじってるし孝は何か遠い目してるし

ん？麗は？

「・・・すー、すー」

あ、寝てたのね

どうりで一言も喋らんわけだ。

俺はテンション上がってて寝れん・・・

まあ常にテンションは上がってるけど

まあいいか

さて、高城の家につくまで俺が見張りとかしてましようかね。

外伝―もしかしたらこんな人があったかも―(前書き)

今回は見ても見なくてもいいです

急展開が超展開だからな!

注意…これはもしかしたらの話なので本編とは無関係

外伝―もしかしたらこんな人があったかも―

これは蓮児が学校から脱出した直後の話である！

side―蓮児―

よしよし、さっさとみんなに追いつくかな

ゾンビをライドブッカーガンモードで撃ち飛ばしたり轢いたりしながら進む

まあすぐ追いつくだろう

何かよっぽどの事がないかぎりはね

シュウウウウン・・・

おおおう！？

キキイイイイ！！

な！？

何であのオーロラが！？

「へえ・・・」

本当にゾンビだらけなんだね、この世界は」

あ、あれは・・・
あいつは・・・

「海東 大樹・・・？」

「僕を知ってるって事は君がこの世界のディケイドかい？」

マジか・・・

この展開は予想外だよ・・・

「ディケイド（偽）だがな！
てか、何の用だよ？」

この世界はあんたの目に止まりそうなお宝はないと思うが」

「いや、あるよ
そのお宝は君が持ってる」

「なん・・・だと？
ライドブッカーとかディケイドライダーとかか？」

いや、まあそうだとしてもやらんがな！

「ううん、それは士の物と同じだからね
価値はない」

ふむ、なら何だろう？

「ま、まさか・・・

俺のことも「何を考えているか知らないけど
絶対違うよ」

ですよー

「僕が欲しいのは君が持ってるWのカードさ」

何と！

Wカードだと！？

「あれ？士の方も持ってるんじゃないの？」

「士が持ってるのはWのFFRのカードさ

君はKRとFRにFARのカードも持っているからね」
なるへそー

俺しか持っていないのねー

「でもまあ

やらんけどな！」

「ふ、それなら力ずくでいただくだけさ！」

ぬお！

ディエンドライバーを！

ならこっちもやってやるよ！

俺はバックルを付け
カードを取り出し挿入する！

【【KAMEN RIDE!!】】

「「変身！」」

【【DECADE!!】】

【【DE—END!!】】

「たっくっ！」

こっちは早くみんなに追いつきたいのによ！」

「君がカードを渡せばいいんだよ」

「だが断る！」

【【ATTACK RIDE!! BLAST!!】】

二人同時にブラストを放つ！

・・・が

「ぐお！？」

ディエンドのブラストが俺に当たる

ちくしょう！

弾道が変則的すぎるな

こっちは直線的にしか飛ばんのだぞ!?

「さあ、カードを渡して貰うよ?」

「ふっ、まだまだ!

行くぜ!」

ディエンドに向かい拳を繰り出す

「ふん!」

ズギュギュン!!

防がれてカウンター食らった!

痛い中々・・・

「なら、これはどうだ?

卑怯だとかそんなんは知らん!」

【FORM RIDE!!】

【FAIZ AXELLE!!】

「行くぜ?」

ピッ！

【Start Up!】

瞬間

俺以外の時間が止まったかのように遅くなった

10秒間しかないため
一気にたたみかける！

ディエンドに殴る蹴るの嵐を浴びせる

―通常視点―

「くっ！

うあ！ぐっ！ぐああ！！」

ディエンドは転がり飛ぶ

「くっ！

ならこれはどうかな？」

【KAMEN RIDE!!】

【GATAKKU!!】

ディエンドライダーから仮面ライダーガタックが現れる

「クロックアップ!!」

ガタックはアクセルフォームと同じ超速の世界へと入る

「今日はこのくらいにしておいて上げるよ
それに、死人達が集まって来たしね」

そういいながらディエンドは一枚のカードを取り出しディエンドラ
イバーへ挿入する。

【ATTACKU RIDE!!】

【INVISIBLE!!】

ディエンドはその場から消えていなくなった

――蓮児視点――

あいつ！

ガタツク出して逃げやがった！

「はぁ！」

「うおっと！

オラァ！」

ガタツクが殴りかかって来たのを避け蹴り飛ばす！

これで決めるか！

【FINAL ATTACK RIDE!!】

【FA FA FA FAIZ!!】

食らえ！

四方八方円柱アタアック！！

クリムゾンスマッシュが炸裂しガタックは消えていった

【Time Out】

アクセルフォームから通常のファイズへと戻る

「やれやれ、『今日の所は』って言ってたから
またくんのか？」

何か無駄に疲れた・・・

俺は変身を解き

ディケイダーに乗る

ちなみにゾンビ共は超速時に一瞬で殴り倒した。

ふう・・・

何か先が思いやられるが

まずはみんなと合流だな・
・
・

第九話 高城の家へー（前書き）

重大な間違いに気づいた！

孝の一人称「僕」じゃん！

間違えてたw

第九話 高城の家へ

side—蓮児—

俺達は今川を渡っております。

「漕げ漕げ漕げよ
ボート漕げよー♪」

「らんらんらんらん♪
川くーだりー♪」

「漕げ漕げ漕げよ
ボート漕げよー♪」

「らんらんらんらん♪
川くーだりー♪」

ああ・・・

ありすちゃんが歌ってるよ・・・

萌える・・・

「Row, row, row your boat
Gently down the stream, ♪」

「Merrily, merrily,

m e r r i l y, m e r r i l y,
L i f e i s d u t a d r e a m ♪」

あ、英語で歌い出した。
すげえ・・・

てかありすちゃんって小2だよな？

なんで英語で歌えるんだ！

絶望した！人間のスペックが平等じゃないことに絶望した！

俺はグロング語を覚えよう

まあいいや

俺も歌おう

「o n t h e R o a d ♪
誰も旅の途中
本当の自分自身
出会うため♪」

「わぁ
レン君すごい！」

ふっ！

コレくらいしか歌う物ないぜ！

「歩き続けるのさ今を♪

W e a r e A l l t r a v e l e r s

僕の目の前に広がる♪」

「うう・・・ん」

おおう！

調子こいて歌ってたら冴子が起きそうになっちまったよ！

え？冴子は今どうなってるって？

寝てるよ？

俺の膝を枕にして

ジー・・・（寝顔を見つめている）

あ、よだれ垂れとる。

「う、むう・・・」

何この可愛い生き物

やべえ、どっかにつれさらいそうになる・・・

クロックアップで

てか孝も寝てるけどさ

こっちは何か額に『桃・浦・金・龍』って書きたい。

あと『手羽』

何言ってるんだ俺

・

・

・

・

「みんな起きて！

そろそろ渡りきっちゃう！」

先生が言う

ちっ・・・もう少しで手羽まで書けてたのに・・・

「冴子」

朝ですよ

おきなさ〜い♪」

「う・・・む？」

「俺に元気をありがとう！」

「？何を言って・・・」

「よだれ垂れてますよ」

「っ!？」

おゝおゝ

顔真っ赤にしちゃってゝ

冴子はクールビューティって訳でもないよね

「ふわゝあ・・・」

「ぷっ! た、孝! 何よその顔!」

「は? 何が?」

桃浦金龍の事ですよ

「ってうわ!

何だこれ!

蓮児! お前か!」

「大丈夫、油性だから」

「余計ダメだろ!？」

「はっはっは!

冗談だ!

ちゃんと水性だか・・・」

俺が持ってたの・・・油性・・・

「・・・・・・・・」

「ちょっと、待て
何だその沈黙」

「ど、どんまい」

「お、お前は・・・・」

青年洗顔（必死に）中・・・・

さて、と

川も渡りきったし・・・

「寝よう・・・・」

「寝るな！」

「おお！高城！

耳元で大声出すな！

冗談じゃないっスかー」

「あんたの冗談は本気に聞こえるのが不思議よね」

ひどひ・・・

このツンデレラめ！

「何」

「すみませんでした。」

「ふう・・・」

な、何とか落ちた・・・」

お、孝が洗顔から帰ってきた

「お帰りー

どうした孝？ 顔が赤いぞ？」

「落とすために顔擦りすりぎたんだよ！
何だその他人事みたいな顔！」

まあ何だ

スマンかったよ

「蓮児ー

手伝ってくれ」

ん？

ああ、ありすちゃんを降ろすのね

「うーい

さあ、ありすちゃん！お兄さんの胸へ飛び込んでおいで！」

「うう、あの、あの・・・！」

「ん？」

どうしたの？」

「・・・・・・・・おぼんつ・・・・・・・・」

ああ、そうか・・・

notパンツか・・・

「これだから男子は！
私達も着替えるからこっち見ないでよ！」

「俺は、危険を犯してでも覗きに行きたいんだが
そこん所どう思う？」

「来たら、本気で殺す」

・・・・・・・・た、高城のあの目はマジだ・・・・・・・・！

今のあいつには見切りも通じなさそうだ・・・

「わ、私は別に――」

「あんたはもういい！」

ああ、冴子がおぜう様に連れてかれた・・・

「わん！」

「よう！ジーク！

元気か？」

「わん！わん！！」

おお、すげえ元気

ちなみにジークは原作と同じくコータが名付けた。

俺が

ジークって言うんならフリードかバルムンクにしようぜ！って言うってけど結局ジークになりましたとさ！

ははん！！

おぜう様達着替え中……

青年二人銃の扱いかた教え（教わり）中……

「蓮児は使わないの？」

「ああ、俺はライドブッカーあるしいや
あとマグナムもあるしな」

「そうか、分かったよ」

「レン君！」

お、来たか

おお、おお、麗、武装したね

てか冴子も着替えたのね

スカートきわどい・・・

てか、見えとるやん

何がって？

男達の夢と希望がだよ

「あははは」

「うふふふふ」

「でひゃひゃひゃー!!」

「わん！」

上から孝、コータ、俺、ジーク

「・・・・・・・・」

「おい！？何で俺だけにドン引きですみたいな顔なんだよ!!」

そんなのは神喰らいの下乳さんだけで十分だ！

ちょい前から何言ってるんだ、俺

さて、俺達三人は堤防に登りゾンビ共がいなか確認する

「クリア！」

「ゾンビ共はいないぞー！」

「静香先生！」

「よし、いっくわよー！！！」

ガロオオオオ！！

ドギヤアアア！！

おお、豪快だな

コータが何か驚いてるな

「川で阻止出来てた訳じゃないみたいね」

高城が双眼鏡であたりを見回しながら言う

「世界中が同じだとニュースで伝えていた」

パンデミックだったか？アン○レラとかいんのかね？

「でも警察が残っていたらきつと！」

「・・・・・・・・」

「そうね

日本のお巡りさんは仕事熱心だから」

「うん・・・・うん！」

お？高城が何か穏やかな顔してる、珍しい・・・
いつも目つり上がってるのに

「何？」

「すいませんでした」

「何謝ってんのよ？」

「これからどうするの？」

先生が聞く

「高城の家に行けばいいだろう
ここから一番近いしな」

「そうだけど、あのさ」

孝が神妙な顔に・・・

「分かってるわ

期待はしてない」

ふむ、ここまでは高城の親父さんとお母さんがあんな人達とは思
もよらなかったな・・・

「よし！行こう！」

俺達は高城の家に向かう事にした。

番外―過去にも俺、参上!―(前書き)

ノリでやった後悔はしている(え

ノリでやったからあんま面白くないかも

時間枠はゾンビ襲来前

本編に関係があるかは謎

番外―過去にも俺、参上!―

side―蓮児―

うん、まだまだゾンビは来ないな・・・

どうせなら来なくていいのにな・・・

さて、今日はどうしよう

部活行くのは何か嫌だしなあ

冴子さんに勝った事により何か部員達に目の敵にされてるんだよな・
・

まあ、いいけど!

じゃあどうしませう・・・?

何かアツ―と驚く事ないかな?

シュウウウウウウン・・・・

アツ―!

何であのオーロラ的な何かが!?

シュウウウウウ・・・

え？ちょ、何か近づいて来る

シュウウウウウ・・・

よ、よせ！よるな！

シュウウウウウー

じよ、冗談だろ？ジョニー？

シュウウウウウ・・・

あゝあ、引き込まれた！

・ ・ ・ ・ ・

シュウウウウウ・・・ペイツ！

ちょ！ペイツて！ペイツてされた！

まあいいさ

現状確認だ・・・

何かオーロラっぽいのに引き込まれて違う世界に来たっぽい？

「うーん、俺に何をさせようって言うんだ？」

まあ、コンビニ言ってみるか

幸い一面荒野とかじゃなく普通にさっきまでいた世界と同じだしな

・
・
・
・
・

なん・・・だと？

何か時間帯がおかしい・・・

いや、過去に来たっぽいよ

何で分かったかと言うとさ

まず学校

俺が通ってた藤美学園は普通にあるよ

高城家もありましたよ
右翼だしデカイ家だし

まず高城の家だろうな

やっぱ過去だな
つつてもちよつとだけ過去なんだけど

世界を渡ったんじゃないくタイムスリップかよ！

中々、楽しいねえ

うん、戻る方法なんぞ知らんし戻れるまで色々みて回るか・・・

・
・
・
キングクリムゾン！！

・
・
・
　　夜

さて、見てまわったけど
あんま変わり映えしないわ

まあ、この時代は孝とか中学生あたりって言う
ちよい過去なだけだから当たり前か・・・

そろそろ帰りたくなつたよ

帰れなかったら俺、野宿じゃん？

いや、野宿も経験しとくかな？

とか何とか考えながら道をあるく

人がいねえ・・・

・・・ん？

と思つたらいた。

あれは・・・

「うへへ・・・

姉ちゃん可愛いな一発やらせてくれよ」

うん、変態と変態に襲われそうになってる女子中学生だな

変質者は編集者か・・・

鎌田みたいな・・・

俺多分今日一番意味わからん事言つたわ

それはそうとあの女子中学生、どっかで見たことあるような・・・？

まあいいや

救出救出！

『ファイナルアタックライド！』（出来るだけ似せた声で）

『ディディディディケイド！！』（限りなく似せた声で）

変態の背中をジャンプ蹴り〜！！

ドゴツ！

「あべし！？」

クリティカルヒット！

「痛っ！

何だテメエは！？」

ふっ、ありきたりだな

「何だテメエは！？と聞かれたら、答えて上げるが世の情け・・・」

「・・・」

「あ、ここふざけちゃいけないパターンか？」

「デメエ!!」

「おっと」

何か殴りかかって来たから受け止めました

「なっ!？」

「ハイッ!そのまま・・・地面へドン!!」

「がっ!」

地面へと叩きつけると何かピクピクしてる・・・

男のピクピク何て見たくないわ!

出来る事なら女の人のビクン!ビクン!が見たいわ!

・・・俺は末期か?

「何者だ?お前は？」

お、女の子が喋るかk・・・

「・・・・・・・・」

冴子さんじゃん！

マジか！？

もしかしてアレか？

確か原作で冴子さんが話してたよな？

自分の過去の事

何だったか・・・

変質者をフルボッコにしたんだっけ？

なるへー

だから木刀が俺に向けられてるんだな

・・・なして？

「何者だと聞いている」

何だろう？

この冴子さん凛とし過ぎてないか？

まあ、名乗るか・・・

「俺は通りすがりの仮面ライダーだ

覚えなくていい」

本名は名乗らなくていいよね」

名前は聞かれてないしな！

「ふざけているのか？」

「はっはっはっ！」

ふざけてない俺は俺じゃないぜ！」

ヒュッ！！

パシッと

「何っ！？」

「いきなり木刀を振るな！」

まあ俺の知ってる未来の冴子さんとは鋭さも速さも色々違うから余裕で受け止めたけども

「別にあんたをどうしようって分けじゃないし
そんなにキレるな」

何か未来の俺が過去の冴子さんと話して何か未来に支障があったらいけないからここらで行きますかね

「まあいいや、それじゃあな、俺はコイツを警察に連行するから
じゃな」

さて何か言われたりする前にダッシュ！

「なっ！待て！」

変態は絶賛引きずり中

時々ビリビリ！って音が聞こえるけど気のせい気のせい

・ ・ ・ ・ ・

sideー過去冴子ー

何だコイツは？

私が夜道を歩いていると怪しい男が現れ

「うへへへ・・・

姉ちゃん可愛いな一発やらせてくれよ」

などとのたまった

私はその男を持っていた木刀で一生歩けなくなるほどに叩きのめそ
うとした時

『ファイナルアタックライド!』

『ディディディディケイド!!』

と訳の分からない事を言いながら一人の白髪はくはつの男が私の目の前の男を蹴り倒した

「何だテメエは!!」

目の前の男が白髪の男に言う

その言葉に白髪の男はふざけている

それが癪にさわったのか男が殴りかかるが

「おっと」

それを受け止め

男を地面へ叩きつけた。

そして白髪の男が私へ近寄ってきた

私は木刀を男に突きつけ

「何者だ？」

と聞けば

「俺は通りすがりの仮面ライダーだ
覚えなくていい」

と、やはりふざけた事を言った

「ふざけているのか？」

「ふざけてない俺は俺じゃないぜ！」

プチッ！

ヒュッ！

私は無意識に木刀を振るっていた

パシッ！

「何っ!？」

その男は半ば本気だった私の木刀を片手で受け止めたのだ。

「いきなり木刀を振るな！」

と、言い

「別にあんたをどうしようって分けじゃないし
そんなにキレるな」

別にキレてなどいない

「まあいいや、それじゃあ俺はコイツを警察に連行するから
じゃな」

と言い走って行ってしまった・・・

「なっ！？待て！」

引き止めるがもう既にかなり遠くへと行っており声は届いていないようだった。

何だったのだ、あいつは・・・

・ ・ ・ ・ ・

side—蓮児—

まあ色々あったけど

元の時間に帰ってこれたよ

いやあ、過去の冴子さんは可愛かったな

うん、うん

あの変質者の襲いたい気持ちもよくわかるよ！

わかつちやダメじゃん・・・

第十話一破壊者の出番は・・・一（前書き）

はい

本編

今回はへんし・・・ん？

第十話―破壊者の出番は・・・―

side―蓮児―

「ね、孝！

気づいてる？」

「何をだ？」

「あたしたち・・・

夜が明けてから、まだ一度も出くわしてないわ」

と、お二人さんが会話しておりますが

確かに嘘みたいにゾンビ共がないのよねゝ

何であんな腐るほどいたのに何でここら辺にはいないのでしょうか？

あ、もう腐ってたか

あ、ちなみに俺も孝達と一緒に車の上にいるよ

仁王立ちで

何回落ちそうになったことか・・・

じゃあ止めろって？

だ が 断 わ る!!

・ ・ ・ ・ ・

「わっ!ここも!
もういや!」

「じゃあそこ左、左よ!」

おおう!

落ちる落ちる!!

てかさっきまで何もいなかったのにいきなり沸いてきたなあ

ていうか何かさあ

進行方向にワイヤーっぽい何かが見えるのは気のせいか・・・

俺、ここらへんの記憶薄くて・・・

「駄目よ、駄目!
停めてええ!!」

麗さんが気づいたね

……いや、落ち着いてる場合じゃねえよ！

「ワイヤーが張られてる！
車体を横に向ける！」

冴子が叫ぶ

あ、ちよつ、待っ！

ドガッ！！

俺が最後に見たのはゾンビ達が車に押されワイヤーで千切れ飛ぶ光景だった……

って何でBAD ENDみたいになってんだよ！

やっぱちゃんと掴まってりゃよかった！

俺だけワイヤーの内に入っちゃった！

「蓮児い！！」

孝が俺を呼ぶ

「大丈夫だ！」

受け身とれたしな

などと言ってたら車が壁へと急発進

「先生ッ！前っ！前っ！！」

車が急ブレーキをかける

「え？」

その反動で麗が車から落ちる！！

孝が手を伸ばすがとどかない

「あゝっっ！
がっ・・・」

そのまま地面へ背中を強打する

孝が麗を守るために車から飛びおりショットガンを放っている

いや、さっさと戻って加勢せねば！！

俺はライドブッカーをガンモードにしてワイヤーを足場に車の上に
飛びのる

「どっから沸いてんだコイツら！」

そう言いつつライドブッカーを乱射する

「弾切れかよ!!」

孝がショットガンの弾を取り出すが落としてしまう

「くっ、くそ!!」

「小室君！」

私が支える!その間に宮本君を！」

「駄目だ、冴子！」

木刀で戦うにはゾンビ共が多すぎる!

なので俺も戦います!!」

ライドブッカーをソードモードにしてマグナムを引き抜き、車から飛び降りる

「蓮児・・・」

「よし!行くぜ!!」

・
・
・
・
・

ライドブッカーとマグナムを使いゾンビを蹴散らす

「やれやれ、多い・・・まったく本当にやれやれだぜ」

「畜生!!」

孝が叫ぶ

何か孝が諦めムード何だけど？

「そうか！」

「きゃっ！」

と、思ったら麗の胸に銃の紐くくりつけて

「平野！こいつは!？」

「トリガーガード前のレバーを押して！
それでセイフティが外れる！」

撃ち出した。

が・・・

「当たらない！当たらない！！
当たらない!!！」

中々ヤバいな・・・

「オラッ！」

ふう、やれやれ、冴子さんやこれ何てイジメ何でしょうね？」

「ふ、確かにイジメのような状況だな」
まったく・・・

俺の切り札・・・使う事になるかな・・・？

「高城さん！」

高城が車から飛び出し落ちていた銃をひろう

「うおお！高城！
危ないぞ！」

「うるさい！
だまってなさい！」

「弾は足下に！
使い方がかりますか！？」
「アタシは天才なの！！！」
コータが問い高城が答える

「おっと！
ふん！！！」

高城に近づいて来たゾンビの頭を砕く

砕いたことにより

嫌な液体が高城に降りかかる

「アタシは臆病者じゃない！」

アタシは臆病者じゃない！！」

高城がショットガンを放つ

「死ぬもんですか！」

誰も死なせるもんですか！

アタシの家はすぐそこなのよ！！」

高城が弾を拾い、込め、放つ

だが

「くそっ！」

孝が使っている銃の弾がなくなり高城が拾う弾もなくなった。

「！？冴子！」

冴子が木刀を奪われ服をゾンビに引っ張られている

俺はとっさにライドブッカーを冴子にまとり付いているゾンビ共に投げる

ライドブッカーは回転しながらゾンビを斬り裂く

「すまない！蓮児！」

「ああ！

ていうかしまった！

撃てばよかった！」

畜生何てとこでうっかりを・・・

ライドブッカーはゾンビがうようよいる場所にある

みんなはもう諦めている・・・

諦めさせるか！

俺が、みんなを救う！

俺はゾンビ共の前に一歩出る

「蓮児？何を・・・！」

冴子が聞いてくる

「みんな！

コイツらは俺が片付ける！

だからみんなは高城の家へ行け！」

「！？何を！」

「覚悟しろよ

この蛆虫の佃煮どもがああああ！！！」

俺はディケイドライバーを腰につけバックルを開く、そしてマグナムを撃ちライドブツカーの周りにいるゾンビを殺しライドブツカーを拾いカードを取り出す

「行くぜ！
変身！」

カードをバックルへと挿にゆ

『みんなその場で伏せなさい！』

う！って何！？

ガッ！

あっ！入らなかった！

スバアアアアン！！！！

ゾンビ達が凄まじい水圧の水がかけられ吹き飛ぶ

「今の内にこちらへ！
車は後からでも回収できる！」

・・・マジか・・・
いや、まあバレなかったからよかった・・・のか？

「ここならもう大丈夫!」

ああ、確かここで高城のお母さんが来るんだったか・・・

「いや、まあ助かったな・・・
よかったよかった・・・!!」

みんな安堵の息を吐いている

「危ない所を助けていただき
まことにありがとうございます」

冴子が消防服っぱいのを着た一人に感謝の言葉を言う

「当然です」

そう言いヘルメットを脱ぐ

「娘と娘の友達のためなのだから」

「ママ!」

ああ、あれがお母さんだったのな

・・・いや、高城はお母さんにも似てないのか?

ふむ、まあ今はそんなこといいかな・・・

「何か、かっこつけたのが中々恥ずかしい・・・」

てか何か無意識にだか蛆虫がどうの言わなかったか？俺

ソ○ヴァか俺は・・・

まあいいや

俺達は今度こそ高城の家へ向かう。

第十一話－高城パン登場－（前書き）

学園黙示録のアニメみたよ・・・

グロいてかきモいW

やばいなあれW

第十一話―高城パン登場―

〽高城の家〽

side―蓮児―

「た、孝い・・・」

「行くわよお

逃がさないでね

小室くん」

「いたいのいやああ」

「やーッ!!」

うーむ・・・

何かおもしろいな

え？何してるかって？

いや、みんなそれぞれ自分の事してるんだけど

俺だけがイマジ・・・暇人ですて

だから孝と麗と先生がいる部屋に聞き耳立ててるよ

俺、現在進行形で怪しさMAXだよ

さて、そろそろ先生が出てきそうな雰囲気なので俺は案内された部屋に帰るわ！

・
・
・
・
・
やれやれ、部屋に戻っても暇だった・・・

まあ広い家だし探検して見るか・・・

遠慮なんてせずに自分の家のように歩いてやるよ！

・
・
・
・
・
おや？
あれは

「ようう、高城いゝ」

「・・・」

うわ、無視だよガン無視・・・

「おぜうさまゝ・・・」

「何よ、うるさいわね」

キレとる・・・超キレとる

そういやお母さんと喧嘩してんだったか？

「何かあった？」

「うるさいわね！
ほっといて！」

そういい走って行ってしまった・・・

「うゝむ・・・
アノ日か？」

いや、まあ違うけども」

「レンくゝん」

「うん？ありすちゃんどうしたの？」

「これ見てー

おじさんに貰ったー」

うむ？

ぬいぐるみ？

ありすちゃんがぬいぐるみを俺に見せる

なっ・・・

こ、これは・・・

この、腹にポーチみたいなのをつけてて背中に羽が生えてるペンギンっぽいのは・・・

「プ○ニー・・・だど？」

ま、まさかこの世界にプ○ニーがあるなんて

俺はありすちゃんからプ○ニー人形を貸してもらう

『やめるっス！』

「うお！喋ったあ！？」

「このぬいぐるみ押すと喋るんだよ」

そうなのか・・・

プニ

『やめるっス！』

プニプニ

『何するっス！』

プニプニ

『痛いっす！』

ブニブニブニ

『出るところ出るっスよ!？』

ドゴツ！

「すいませんでしたっす!!」

ズドドドド！！

『ギ
ャ
ア
ア
ア
ア
ア
ッ
ス
！
！
！
！
！
！
！
！』

何これ面白い

「もお、レン君！」

そんなに乱暴にしちゃ駄目だよ！」

「あ、ああ、ごめんね」

ちよつと楽しすぎた・・・

欲しいなこれ・
・
・

どこにあるんだろ・
・
・

「蓮児、何をしているんだ？」

おや、この声は冴子ですな

「ん、いや、っておお!!」

冴子が着物来とる!

「どうした?」

「いや」

着物すごい似合ってるね!

これが和服美人か・・・」

「そ、そんな事はないさ」

「いやいや、吃驚するくらい似合ってますよお」

長い髪だから尚いいね! 多分10人中10人が振り向くくらい綺麗だな」

俺髪ってロング結構好きなのよね

「・・・・・・・・っ」

おや? 冴子がめっちゃ顔赤いんすけど?

風邪か?

「ほ、誉めすぎだ・・・」

「だって本当の事ですしね」

「ん? 蓮児に先輩にありすちゃん、何してるんだ?」

お、孝が来たな

「いや、孝よ

見ろよ冴子の姿
綺麗だよな？」

「え？あ、ああ、すごく似合ってますよ先輩」

「う、うむ、ありがとう」

うんうん！

さて、何か近くの部屋からコートと高城の声が聞こえるんだけど
取りあえず開けてみるか
ガチャッと

「蓮児」

何かホッとした顔をしてる高城さん

「なにしてんだ？」

孝が聞く

「小室、アタシ達一度話合っておくべきことがあると思う」

話し合う事か・・・

「ありすも一緒にいいの？コートちゃん？」

「もちろん！」

ありすちゃんもジークも仲間だからね！」

「わん！」

「何もここに集まって来る事ないじゃない」

麗が不満を言う

・・・あれって・・・

「なあ麗

そのシャツ剥ぎ取っていい？」

「駄目！絶対駄目！」

「・・・」

ワキワキ

「ちょ、その手何よ！？
や、やめ！助けてえ！」

「あんた・・・
一回死ね」

「た、高城さん？
人は一回しか死ねないです」

まあ、俺一回死んでるんだけど

「なら、死にかけなさい」

「マジですいませんでした。

さ、さて本題に入りましょう」

「まったく・・・

話って言うのはアタシ達がこれからも仲間にいるかどうかよ」

「仲間って・・・」

麗が驚いているが・・・
なるほどねえ

「当然だな

我々はいまより大きく結束の強い集団に合流した形になっている
つまり・・・」

「そう、選択肢は二つきり！
飲み込まれるか」

「別れるかってか？」

「でも別れる必要なんてあるのか？」

俺と孝が言う

「ここで周りを見わたせばいいわ！
それで分からねければ・・・」

「アタシの事名前で呼ぶ権利はナシよ！」

俺も名前で呼んでいいのかね？

「街は・・・」

孝が双眼鏡を覗く

「ひどくなる一方だな・・・」

「確かになあ」

こうなった原因がわかればタイムベントやらハイパークロックアツプやらで大元を叩きに行くんだかなあ・・・

「手際がいいよな

親父さん、右翼の偉い人だけの事はあるよ

お袋さんも凄いし」

「ええ、凄いわ！

それが自慢だった！

いまだってそう、これだけの事を1日かそこらで・・・」

高城が泣き始める

「でも、それができるなら・・・」

「高城・・・」

「名前で呼びなさいよ！！」

高城が叫ぶ

「分かってる！分かってるわ！！私の親は最高！

妙な事が起きたとわかったとたんに行動を起こして屋敷と部下とその家族を守った！！

凄いわ凄いわ！

本当に凄い！！」

高城が何かヤバイ！

「もちろん娘のことを忘れてたわけじゃない！
むしろ一番に考えた！」

「高城！落ち着け！」

俺は高城を呼ぶが高城は聞く耳を持たない

「さすがよ！

本当に凄いわ！

さすがアタシのパパとママ！！

生き残ってる筈がないから即座に諦めたなんて！！」

「やめろ！！！！

沙耶！！！！」

孝が高城の胸ぐらを掴み上げる

「かはっ・・・は・・・っ」

「あ・・・何よ、いきなり
でもようやく・・・」

「お前だけじゃない！
同じなんだ！！」

みんな同じなんだ
いや、親が無事だと分かってるだけ
お前はマシだ」

「・・・分かったわ」

「さて、孝、もういいだろ？
女の子の胸ぐらは掴む物じゃないぜ？」

「あ・・・
悪かった」

孝が手を離す

「ええ、本当に、でもいいわ

さ、本題に入らないとアタシ達は」

すると何か車やらトラックが敷地内に入ってきた
「なんじゃいありゃ？」

そう言うと

「そう、この県の国粹右翼の首領！

正邪の割合を自分だけで決めてきた男！」

高城が何か説明口調で言ってるな・・・

「アタシのパパ！」

やれやれ、いよいよ高城パパンの登場か・・・

にしても首領か・・・

俺はあれだよな？

大首領（偽）だよな？

何で張り合ってたんだ俺・・・

第十二話ーみんなの信頼ー

sideー蓮児ー

「この男の名は『土井 哲太郎』！
四半世紀の間共に活動してきた我が同志であり友だ！

救出活動のさなか部下を救おうとし・・・
囃まれた！」

おお

高城の親父さん、何か分かんないが凄いなあ

てか刀って銃刀法じゃね？

いや、まあ今の状況じゃ全く関係ないな

てか銃刀法以前の問題の俺が言うなって話しだな

「我が友へ

最後の友情を示す！！」

ズンッ！！

親父さんが刀でゾンビになった友の頭を斬り落とす

頭落ちてなあーあー言えるんだなあ

「さらばだ・・・

友よ!!」

グシャアッ!!

親父さんがゾンビの頭を踏み砕く

「・・・これこそが我々の

“いま”なのだ!!

素晴らしい友

愛する家族

恋人だった“もの”でも

ためらわずに倒さねばならない!!

生き残りたくば・・・

戦え!!」

「おゝ

高城の親父さん格好いいな」

・・・あ、誰も反応してくれなかった

「刀じゃ効率が悪すぎる」

コータが言う

「いやいや、刀を侮っちゃ行けないぜ？」

俺なんてライドブッカー手入れしてないんだぜ？

なのにあの切れ味だよ？ていうかライドブッカーは斬っても何故か血に濡れる事がないんだけど

しかも刀じゃなくて両刃剣なんだけど

あれ？何の話してたっけ？」

「……まあ、蓮児の剣はともかく

決めつけがすぎるよ

平野君」

……俺って一体……

ちよつとプリ〇ーになってくるわ

まあコータは冴子に任せて……

俺はそろそろ一番手に馴染む刀が欲しいんだけど
ちよつと頼んでみようかしら

親父さんに……

護業とか欲しいな

俺の名前が名前だけにな

いや、まあいいとして

やっぱ刀は欲しいな

レプリカの刀でも木刀とか斬れる自信があるよ

「さわるな！」

おお、何やら考えてたらコータが何かキレとる！

「邪魔するなよ

まともに銃も撃てないくせに！」

「いやいや、まともに撃てないのが普通だろう？」

「・・・！！！」

コータさんは銃を持って走って行きました

・・・あれ？俺が言ったの正論じゃね？

「なんなんだ

あいつ！」

「分かってやれ

平野君もまた男子なのだ」

「それは分かっていますけど」

「ふう・・・

君はそういうところが・・・いや、同じ硬貨の裏表か」

冴子も出て行き

「ハア~~~~~ア」

高城も出て行く

「なんなんだ・・・」

「みんなピリピリしとるね

何でそんなにピリピリすんだろう？

あ、俺が脳天気なだけか

はっはっはっ！！

ちょっと、おとぎの国に行ってくるわ」

「ま、待て蓮児！

お前はアリスだけどアリス違いだ！」

「ふふふ・・・」

先生に笑われた！

鬱だ死のう・・・

【ATTACK RIDE！！ BLAST！！】

ズドドドド！！

—BAD END—

コンティニュー？

はい

いいえ

おわれ↑ピッ！

って終わるかあああああ！！！！！！

ったく歪みねえな

何が？

知らん

「あのね、小室君」

あ、俺が馬鹿な事してる内に孝と先生が何か話てるな

「私ね

臨床研修をしてる大学病院から

臨時に校医として派遣されることになった時

決めたことがあるの・・・」

「・・・いきなりなんです？」

「お願い 質問して

“なにをですか” って質問してよ
そしたら、いつもどおりにやれるから、きつと！」

「……ごめんなさい先生
今は無理です」

あ、俺は無理じゃないから何をですか？ っって質問してもいいかな？

「なら、どこかに行って
私は私のルールを絶対に守りたい、守りたいから
今はどこかに……」

うん、質問できんわ

「……」

孝が部屋へ入る

「今、俺はクウキだ
超薄い！ 仮面ライダークウキ♪」

「蓮児君も悪いけど……」

「あ、はい！ すいませんでした！」

そう言い部屋に入る

やれやれ、先生のあるな姿は初めてみたわ……

「ま、こんな状況だからみんなの気持ちも分かるがな」

「蓮児・・・」

「こういう時だからこそ
麗、もう一度みんなでちゃんと話をした方がいいと思うんだが、ど
うだろう？」

「いいんじゃない？」

「ふう、じゃあ、ちよつと行ってくるかな」

そう言い俺は部屋を出た。

・
・
・
・
・

「ざけんじゃねえ！
さっさと渡せよ！」

「イヤだ！」

おや、これはコータが高城父と初対面イベントか

コータが銃を渡せと言われているが渡そうとしない

「ダメです！」

これは借り物なんだからそれに・・・
ここで俺以上にうまく使える奴なんていません！」

「偉いぞコータ！
よく言った！」

「な、何だお前は！」

「通りすがりの親友だよ、覚えておけ」

「れ、蓮児・・・」

「大丈夫かコータ？」

半泣きなコータの加勢だ！

「ふん、おい、構うこたあねえから」

一人が銃を無理やり奪おうと近寄ってくる

やれやれ、大人気ないな

「なにを騒いでいる！！」
おお、親父さんが来たよ

「か、会長！」

「こ、このガキ共が銃をオモチャと間違えてやがるんで」

「別に、俺達は銃をオモチャと間違えちゃいないさ」

まあ俺のライドブッカーは端から見ればオモチャだけでもな！

「少年ら！名を聞こう！

私は『高城 壮一郎』

憂国一心会会長だ！」

迫力あるなゝ

「ひ、ひ、ひ、平野コータ！

藤美学園2年B組！

出席番号32番です！」

「俺の名前は有栖 蓮児
！」

同じく藤美学園2年B組！出席番号3番！」

さすがにふざけないな

「声に覇気があるな！

平野君！有栖君！

ここまでたどり着くまでさぞ苦労したことだろう！」

ああ、見える

親父さんの背中にゴゴゴゴゴ！ってのが見える

「あなた、この子達は・・・」

「所属するクラスで知れた」

「まあ！」

「どうあっても銃は渡さぬつもりか？」

その問いに

「ダメです！イヤです！

銃が無くなったら、俺は、俺はまた元通りになる！

元通りにされてしまう！

自分に出来ることがようやく見つかったと思ったのに！！」

コータは泣きながら否定する

「出来ることとは何だ？」

「あなたのお嬢さんを守ることです！」

孝がそう言い歩いて来る

「こ、小室」

「小室・・・なるほど

君の名前には覚えがある

沙耶とは長い付き合いだな」

「はい、ですが

この地獄のはじまりから沙耶・・・
お嬢さんを守り続けて来たのは平野です」

「そうだな、コータがおぜうさんを守らなきゃ
今頃、奴らになって人を襲ってただろうよ」

「・・・」

「コータちゃん！」

ありすちゃんが駆け寄りコータにしがみつく

先生と麗もやって来る

「彼の勇気は自分も目にしております
高城会長」

「アタシもよパパ！」

冴子と高城も来る

ま、なんやかんやで全員そろったな

「ちんちくりんの軍ヲタだけど
こいつがアタシを守ってくれたの！
パパじゃなくてね！！」

うんうん！

友情はいいよね！

「大体コートがいなけりゃ

銃もまともに撃てなかったしな

俺も剣類は使えるけど何か色々めんどくさい銃は使えんしな・・・」

「そうよ、平野がいてくれたから私達みんなここまで来れたの」

まあ、これで親父さん達も何とかなったろう

よかったよかった！

外伝1―世界の破壊者―（前書き）

今回もノリだ！

注：所詮ノリで書いたので続きがあるかわ作者でもしらん

1人キヤラ崩壊の方がいます

外伝1―世界の破壊者―

―とある場所―

そこにはある建物が建っていた。

その建物の名前は【光 写真館】

そして今その扉が開かれる

「ここは、何のせか・・・うお！
な、何だコイツら!？」

「士!どうしたんだ・・・うわああああ!!!!ゾンビイイイ
!!!!!!」

「士君!ユウスケ!？」

「夏海は中に入ってる!
ユウスケ!変身しろ!もしコレが本当にゾンビって奴なら噛まれた
ら終わりだ!」

「あ、ああ!
くそお!何なんだよ!この世界は!」

ちなみに後で紹介するのもめんどいので今紹介する!

最初に出てきた青年の名は【門矢 士】

そうこの世界にいるパチモンの破壊者ではなく
本物の世界の破壊者 仮面ライダーディケイドである。

side―蓮児―

「誰がパチモンかつ！」

「うお！何だよいきなり！」

「ん？あれ？何か突っ込まなきゃいけない気がして」

「また発作か・・・」

「た、高城さん？最近俺に対してひどくない？」

「気のせいでしょう？それに発作なのはいつもの事じゃない」

「ううう・・・」イジイジ・・・

「いじけている蓮児も・・・ハアハア・・・」

sideOut

話は戻り

次に出てきたのが【小野寺 ユウスケ】

仮面ライダークウカ・・・クウガである

んで最後のは【光 夏海】

士達と旅をしている女性である

通称…夏ミカンor夏メロン

仮面ライダーキバでもある。

はい！話は元に戻ります！

ユウスケはアダマムを腰に出現させ変身のポーズを取る

そして士もディケイドライバーを腰に装着しバックルを引きカードを取り出す

「「変身！」」

【KAMEN RIDE!!】

【DECADE!!】

キュイキュイキュイキュイキュイキュイ・・・！！！！！！ピキーン！！

2人は仮面ライダーディケイド、クウガへと変身する。

「あ” — あ” — . . .」

「はっ！

うわ！ 飛び散った！」

「馬鹿かユウスケ、武器を使え！」

士はそう言いライドブッカーをガンモードにしゾンビへ向けて連射する。

「そうか！

えーと . . . お！ これがいいな！

超変身！」

ユウスケは近くに落ちていた鉄の棒を拾いドラゴンフォームへ変わる

「うおりゃあ！」

ドラゴンロッドあたりのゾンビを蹴散らしていく

が . . .

「本当にバイオハザードだな . . .

それに数が多い . . .

しょうがない決めるか」

士は一枚のカードを取り出しバックルへ挿入する。

【FINAL ATTACK RIDE!!】

【DE DE DE DECADE!】

士の前に10枚の3Dカードが現れその中をライドブッカーから放たれたエネルギー波が通過し

ディメンションブラストを発動する

「うおおお!？」

放たれたエネルギー波はゾンビを跡形もなく消し飛ばす。

「おい!士!当たりかけたじゃないか!」

「当たってないんだからいいだろ
取りあえず写真館にもどるぞ」

2人は変身を解き写真館へと戻る。

・
・
・
・
・
・
写真館内

スライドには何かもう世紀末みたいな感じで様々な建物から火が上がっている風景が描かれていた

「士君!あれ一体何ですか!？」

「俺が知るか」

「バイオハザードの世界とか？」

「明らかに日本だろ、ここ」

士は余裕の表情でコーヒーを飲んでいる

「あんなの見た後によく飲めるな・・・」

「おじいちゃん、テレビはどうなっているんですか？」

夏海がおじいちゃん——【光 栄次郎】——に聞く。

「それがね、どこも映らないんだよ」

「外があんなになつてりゃあたり前だろ」

「ホントになんの世界だここ・・・
なあキバーラお前は何か知らないのか？」

ユウスケがキバーラに聞くが・・・

「さあね、もう私は鳴滝様の命令で動いてるわけじゃないもの
この世界が何なのかまったくわからないわ」

「そうか・・・」

「しょうがないな

俺が外の様子を見てくる、お前らはここにいろ」

「そんな！危険です！」

「そうだぞ士！行くんなら俺も！」

「却下だ、夏海はあんなの見ないほうがいい
それにユウスケはドジって噛まれそうだ」

「ドジるか！」

ユウスケが怒鳴るが士は相変わらずの余裕の表情で

「いいからここにいろ
じゃ、行ってくるぜ」

そのまま写真館を出て行った。

「士だから大丈夫だと思うけど・・・」

「心配です・・・」

・
・
・
・
・
・

「ほう・・・」

こいつら目が見えてないのか・・・

あと音に反応して動いてる・・・か・・・
案外簡単に抜けられそうだな」

士は音をたてずにゾンビの横を歩いて行く

「はぁ、それにしても人がいねえな・・・
人だった“もの”はそこらへんにいるがな」

士は溜息をつき・・・

「ま、その内生き残りとかには合うだろ」

そう言い再び歩き出した。

side—蓮児—

「ハッ！なんか世界の破壊者（本）がこの世界に現れた気がする！」

「また発作・・・はぁ・・・」

「だからひどひ・・・」チーン・・・orz

「落ち込んでる蓮児も・・・ハアハア」

第十三話一妖刀一（前書き）

レンジは新たな武器を手に入れた！

第十三話 妖刀一

side 一蓮児一

ハッ!?

何かこの世界に限りなく似た世界が増えていつてる気がする!

またなに言ってんだ、俺

さて、高城父達の話も終わったし何をしましょうかね?

「何でアタシがそんな事しなければならぬのよ!?!」

「わが娘は語らねばわからぬほどの愚か者ではない!!」

何だろう?

高城の親父さんが言う言葉全てが名言に聞こえる……

「沙耶、ママからもお願いするわ

パパや私だと、あの人達警戒しすぎてしまうもの」

何の話かと思ったらあの何やら言ってたお婆はんらの事か……

「い、一緒に行きます!」

「僕も付き合うよ」

コータと孝が高城に言う

「あたしも……」

麗も行こうとするが

「宮本さんはだーめ

今からもう一度

お薬を塗るの！」

先生に止められる

以下効果音

しばばばー！！

ビクッ！！

いやあああああー

ウフフフフ

終了

「むー」

「私もお供しよう」

「いや、毒島先生のお嬢さんにはしばらく私に付き合ってもらいたい」

冴子は、アレか村田刀を貰うイベントか・・・

いいなあ、俺も欲しいなあゝ

「有栖君」

「ん？え？お？

俺ですか？」

何か親父さんに呼ばれた！

「そう、君だ

君もお嬢さんと共に私に付き合って欲しい」

「？よくわからんが

いいですよゝ」

いくら俺でもこのパターンは予想してなかった・・・
何だろう？

・
・
・
・
・

・
side—??—

ある男が道を歩いていた。

「ん？何だ？何で道の真ん中でバスが止まってるんだ」

男は道に止まっているバスに近寄り
中をうかがってみると

「何にしてんだコイツら？」

バスの中には18禁な光景が広がっていた。

「こんな状況でおめでたい奴らだな
やっと思つけた生存者だが・・・
コイツらから話を聞く気にはならん」

そう言い男はさっさと別の方向へ歩きだした。

その数分後

そのバスから一人の男子生徒が放りだされく奴らへの餌食となった。

・
・
・
・
・

side—蓮児—

取りあえず高城達がおぼはんと口論してる時

俺と冴子は親父さんの前に正座してます

これ、何だよ・・・

俺、何でこんなところにいんのよ・・・

原作だと冴子だけだったじゃん・・・

いや、まあいいけども・・・

「これをどう見る？」

親父さんはまず冴子に話だす

「お、村田刀じゃーん

実物は初めて見るな」

しまった・・・

思わず声に出しちゃった・・・

「ほう？」

鞘から抜かずとも見抜くとは」

原作で知ってますとは言えない・・・

「い、いやあ

お、俺、刀マニアなんで・・・
ていうか当たってた？冴子？」

そういうことにしておこう・・・

俺は冴子に答えを一応聞いてみる

「ああ、この反り浅く

波紋の浮かぬ鋒両刃の小烏造り
蓮兎の言った通り、小銃兼正・・・村田刀と見ましたが」

「うむ、明治半ば

あの村田銃で知られる村田少将が東京砲兵工廠で造ったうちの一本
よ」

なるほど、興味深い・・・
さあ検索をはじめよう

うん、冗談は止めておこう・・・

「豚の頭骨を

一刀両断して刀に傷一つつかなかったと伝えられる」

「眼福でありました。

して――」

冴子が刀を返そうとするが

「もはやそれは貴女のものだ」

その言葉に冴子の動きが止まる

「無礼を承知で申し上げますが
正当な理由がなければいただけません」

「毒島先生の御指南を受けた事がある
その無礼・・・ということで納得できないか」

「ならば父にお渡しいただくべきかと」

そう言った瞬間

高城父が豪快に笑う

おおー！豪快！

「むう、さすが毒島家御息女！」

・・・どうでもいいけど俺、空気だよな？

何この意図せずインビシブル

ていうか俺がここに連れてこられた理由を知りたい！

ま、まさか実は俺が村田を貰うのか！？

絶対ないわ

さっき言ってたしな

それは貴女のものだってな

うゝむ・・・

などと考えてる内に冴子と高城父の話が終わったっぽい

「さて、待たせたな有栖君」

「それで結局俺が呼ばれた理由とは何なんでしょうか？」

謎だ・・・

「その事だが
君にこれを見てもらいたい」

そう言い親父さんが取り出したのは一刀の刀だった

おや、マジか

「ん・・・？」

「これを見て君はどう思う？」

「何だろう・・・」

普通の刀とは違うと言うのはわかりました。」

何だこれ・・・？

何か禍々しいって感じがするな・・・

「抜いてみるがいい」

「いいんですか？」

「君も剣の道を生きるものだ
直に触れようと刀の穢れにはならぬだろう」

何か知らんが親父さんが俺を過大評価してるような気がしてならん

まあいいか、じゃ、遠慮なく抜いて・・・

「こ、れは・・・
刀身が黒い？」

なんこれ・・・
真っ黒つか光に照らすと紫っぽい色だな

「その刀は我が家に伝わる刀だ
それはただ人を斬るためだけに造られた刀
故に銘もない」

「我が家に伝わるって・・・
それは俗に言う、家宝って奴では・・・？」

いや、でも、なるほど・・・

人の血を吸い続け刀身が黒く変色したって感じか」

「その通りだ

代々それを使った者達が謎の死を遂げている」

「妖刀とか魔剣みたいな物か・・・
でも、何でこれを俺に？」

「何、君ならその刀を使いこなせると見たからだ」

マジかよ・・・

「流石に過大評価しすぎじゃ？」

「君の瞳を見ればわかる事だ
迷いのない真っ直ぐな瞳をしている」

自分じゃまったくわからんぞ・・・

「君がこの刀を使いこなす気があるなら持つて行くがいい
使いこなせないなら置いていけ」

そう言われたらねえ・・・

しょうがない・・・
使いこなしてやるよ！

「わかりました！

俺がこの刀の真の使い手になりましたよう！」

「蓮児！」

冴子が心配そうにこっちをみるが

「大丈夫さ、冴子

俺は刀に取り込まれたりはしないさ

何せ俺だからな！」

自分で言っただけ意味わからんな・・・

「ふ、君ならそう言うと思っていた！

ならばそれはもう有栖君、君の物だ

銘をつけるといい」

名前か・・・

「そうだな数々の人間の魂を喰った刀だから
『魂喰』（こんじき）」

「なるほど、その刀によくあつた銘だ」

今ここに妖刀・魂喰が誕生した。

ライドブッカーと二刀で戦えるようになったな

なかなか嬉しいねえ

さて、取りあえず孝達の所にでもいこうかね

第十四話―世界の破壊者登場―（前書き）

もしかしてさ

このサイトで学園黙示録の小説書いたのって僕が初めてなのか・・・？

第十四話―世界の破壊者登場―

side―士―

いや・・・もうside―???―にしてもバレバレだからもういいや!

「さて、ずいぶん歩いたが・・・そろそろ何かないのか?」

などと言いながら士は歩く。

「ん? ありゃ何だ?
ワイヤーか?」

士はワイヤーの張られている道を見つけ近寄る。

「なるほどな、これでコイツらの侵入を防いでるのか・・・
ならこの先に生き残りがいそうだな・・・」

そう言い士はワイヤーを潜り中に入る

・
・
・
・
・

・
side―蓮児―

「女って生々しさ
そのものらしい・・・ゴクリ・・・」

今俺は孝の部屋に思いっきり聞き耳立ててます。

ムフフな展開を期待してな！

とりあえずあの後、魂喰を腰につけて、孝の部屋に別に意味も無く
きたよ。

それで麗が孝の部屋に入ってくのを見たから
俺、絶賛盗み聞き中

ガチャ・・・

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「蓮児・・・・・・・・？」

「しまっ・・・・・・・・！」

なんて事だ！
出てくることに気付かなかった！

「何、やってるのかなー？」

怖い・・・

笑顔が怖い！

「・・・え、えと・・・
ドアノブの掃除を・・・」

「嘘よね？」

「・・・はい・・・」

「正直な事を言って？
怒らないから」

正直に言うしか俺に道はない・・・

「聞き耳立てておりました！

いやゝあれだよな、ギシアンやるかな〜と思って」

———瞬間

麗の纏っている怒気が殺気へと変わった———。

「少し・・・頭冷やそうか・・・」

「ちょ・・・待っ！」

ウギヤアアアアアッスー!!!

・ ・ ・ ・ ・ ・ ・

うう・・・鬼コンボ決められた・・・

逃走する間すらなかった・・・

「あいたたた・・・
軽く全治10年くらいか・・・」

「それ軽いじゃない！」

「おおう!?!
いつの間に!?!」

何か高城が後ろにいたよ！

「んで？何か用かい？」

「パパに呼ばれたのはなんだったの？」

「ん？ああ・・・これ貰ったのよ」

俺は腰につけていた魂喰を見せる。

「それって・・・」

「この家の家宝みたいですが親父さんにいただきました。はい」

「それ、かなり危険って聞いたことあるんだけど・・・？」

「大丈夫大丈夫！なんせ俺だから！」

いや、またわけ分からんことを・・・

「まあ、そうね、あんたなら大丈夫そうよね」

「そうそう！」

そのまま暫く高城と（めずらしくともに）話していた。

・
・
・
・
・

・
side―士―

「ほお・・・なかなかデカイ家だな」

「君、どこから来たんだ？」

士を見て一人の男が話しかける

「あん？あっちのワイヤーの張られてるところからだ」

「そうか、ここは難民のキャンプだ
君も入りなさい」

そう言い男は士を敷地の中へ入れる。

「ふん、結構、人がいるんだな」

・
・
・
・
・
side―蓮児―

・・・・今俺は我が目を疑っています

疑いすぎて失明するぐらい目を擦っちゃった・・・

・・・なんで・・・なんで！

本物がいるんだ！！！！

あれディケイドじゃん？

あの首から下げたカメラは間違いなくディケイドじゃん？

え？何コレ夢？

あ、夢か、じゃあ起きないとな・・・

ゴン！

ブシュー！（何かが吹き出た音）

「あ痛！夢じゃなかった！」

「れ、蓮児？何をしているのだ？」

「いやぁ・・・」

俺の妄想が具現化したのかと思って」

「また発作か・・・」

高城がひでえ・・・

でも今回は違う！・・・といたい！

とにかく話しかけてみよう！

「あゝ」

「ん？何だ？」

「門矢 士さんでしょうか？
もしくはディケイドさんですか？」

俺が言うと士さんは多少驚いた顔をするがまた戻った。

「何でそんな事知っている？」

「いや、実はですね・・・」

そう俺が話出そうとすると

「蓮児、どうしたのだ？
何かあったのか？」

いつのまにか皆がいました・・・

やばい！ここじゃ話が出来んな！

「いや、スマン！皆！俺この人と話があるから、ここにいてくれ！
士さん、ちょっとこっちに行こう！」

「お、おい！」

何で本物がこの世界に・・・？

いや、可能性は無いわけじゃないけど・・・
ふむ・・・謎だ！

第十五話―破壊者達の会話―

side―蓮児―

カクカクシカジカ四角いムーブ

「と、言うわけですな」

「なるほど、大体分かった

お前は、この世界じゃない別の世界で一度死んで
その神とやらにこの世界に連れて来られた、その際にディケイドの
力も貰ったってわけだな？」

まあ、あの後高城家の裏庭に行って話してるんだけど

ものわかりが凄くいい！

さすがディケイド！

「その通りです」

「それじゃ、この世界にディケイドがいるなら俺の役目は無さそう
だな」

帰るか、と士さんが言っているが

「ちよいと、待たれよ！士さん！」

「あん？ていうか士でいい、さんはいらんで？何だよ？」

「あ、じゃあ士で
いや、コレから多分ここに空前絶後に大量のゾンビがやってくる
どっかのバカがバリケードを破壊するおかげでな」

「何でそんな事わかるんだ？」

「いや、まあ神の力みたいな物ですよ！」

原作知ってるからとは言えないのよ！

「あまり人は死なせたくなかったので手伝ってれるとありがたいっス」

「ふん、別にいいぜ
手伝ってやる」

おお！やはり物分かりがいい！

流石ディケイド！

「ああ、そういや気になってたんだが
この世界は一体どうなってんだ？」

「実際分らないんだよ

いきなり一匹のゾンビが学園に来て、まあみんなパニックって何と
か逃げ出したら

もう既に街はゾンビだらけ

てか、街どころか世界中がゾンビだらけだしな」

「なるほどな、どっから発症したかもわからないのか」

「うむ、アン○レラとか分かりやすいのがありやあ
簡単なのになあ」

やれやれ、てか何の目的があってゾンビだらけにしたのかねえ？

間違っってこんな事態になったとかじゃく

意図的にやったんだったら間違いなく狂人だよな

もしくは紫藤みたいなバカ

などと考えていると・・・

シュウウウウウウン・・・

「うお！」

「こいつは・・・」

何かオーロラみたいなの出たあ！？

・ ・ ・ ・ ・

side—???

蓮児は一体何をしているんだ？

あの男は知り合いか？

コソコソと話しているが・・・

ふむ、盗み聞きはよく無いが何故か気になる・・・

「しかし、ここからではあまり聞こえないな」

どうしたものか・・・

これ以上近づくとバレそうだな・・・

と、考えていると

シュウウウウウウン・・・

「うお!？」

「こいつは・・・」

蓮児達の前に何かが現れた

「な、何だ、あれは・・・」

その何かから一人の男が現れた。

・
・
・
・
・
・
side—蓮児—

コイツは！

このおっさんは！

「また、お前か鳴滝
今度は何の用だ？」

鳴滝キターー（。▽。）ー！ー！！

「ディケイド・・・
貴様がこの世界に現れた事により
この世界に存在してはいけない者たちが現れた」

「存在してはいけない者？
なんそれ？」

「それは自分の目で確かめるがいい
この世界を破壊したく無ければすぐにこの世界から出ていけ」

「ふん、お前の指図は受けないぜ
それに元々この世界の用事がすめばさっさと出て行くつもりだしな」

「大体、存在してはいけない者ってのを倒さんと俺たちがヤバイよ
俺一人じゃみんなを守りながらは戦えんぞ」

「そういう事だ

分かったらさっさとどこかへ行け」

「.....」

士がそう言うのと鳴滝は無言でオーロラの中に消えていった。

「やれやれ、毎回毎回、ご苦労な奴だな」

「確かに、てか鳴滝は結局何者なのよ？」

「知らん」

本当に何なんだろうな

あの人

ゾル大佐じゃないんだよねえ」

・
・
・
・
・
side—??—

「あの男は一体・・・
それに、蓮児、君は・・・？」

やはり蓮児のあの姿に関係のある事なのだろうか・・・

考えていても仕方がない

一度ここから離れるか・・・

・ ・ ・ ・ ・

side—蓮児—

あの後、土にカードの事を聞いたりなどをしていつの間にやら時間が立ってました

「なるほどな

俺のお前のディケイドライバーは微妙に違うんだな」

「ホントに微妙な違いだけだね
さて、結構時間たったしみんなの所に戻るかな」

そう言い俺達は戻りだした

「そういや、ユウスケとか夏みかんは？」

「置いてきた」

さいですか・・・

side out

・
・
・
・
・

「え！？俺たちの出番これだけ！？」

「士君が私たちを置いて行くから・・・」

番外一ある日の風景2ー（前書き）

いやあゝ

今度は原作4巻がなくて困り果ててるw

どうしよう・・・

番外一ある日の風景2一

そう！これはみんなのアイドル『有栖 蓮児』が藤美学園に転校してきた初日の話である！

side一蓮児一

何かアイドルになつとるけど？

まあいいや

今日から死亡フラグ満載の日まで通う学園かあゝ

てか広いな・・・

さすが学園ってだけあるね

「みんな、今日は転校生を紹介するぞ」

先生が生徒達に言う

おゝ

原作キャラがいるぜゝ！

何か感動する

「先生！女子ですか！？」

一人の男子生徒が質問する

いるよね一人はこんな奴が

「残念ながら男だ

よし、入ってきていいぞー！」

男子生徒諸君には多少がっかりさせたようだがそんなんは知らん！

よし！行くぜ！

ガララララ！

「俺、満を持してここに爆現！」

「「後ろから！？」」

お、なかなかのツツコミだな！

「あ、有栖・・・

ふざけてないで前に来て自己紹介をしなさい」

「へーい」

前に行き名前を書く

「あれって地毛かな？」

「凄い真っ白だね」

そんな声が聞こえたりした

地毛だよ

「どうも、有栖 零児・・・

あ、違った、有栖 蓮児です
よろしく！」

「名前を間違えるな

さて、みんなこれから有栖への質問タイムだ！」

先生の言葉で多数の生徒が手を上げ質問をする

「それ、地毛？」

「そう、地毛だよ
カッコよくね？」

「どの学校から来たの？」

「それは聞いちゃいけない約束だよ」

・ 転生前の学校とまったく同じ名前の学校があるかわからんな・

「彼女いる？」

「いねえ！」

欲しいっちゃ欲しい

欲しくないっちゃ欲しくないって感じ

彼女なんぞ別にどうでもいい」

「君は所謂ギャグ要員？」

「何故その質問をしたのか小一時間問い詰めたい」

「特技は何かある？」

「特技ね」

剣術と体術は得意

そこらの達人には負けないくらいに」

てか見切りがあれば自分よりレベル高い奴とでも渡り合えるようになるからな・・・

「さて、時間も時間だからそろそろ質問タイムは終わりだ」

ふむ、終わったか・・・

ていうか・・・

小室君に宮本さんに高城さんに平野君がいるけど何も質問されなかったな・・・

高城さんなんて興味無さそうにしとるしな・・・流石ツンデレ

何が流石なのかわからんな

まあいいや！

「じゃあ、有栖はあそこのあいてる席に座ってくれ」

「うーい」

先生に言われた席へ行く

「さっきも言ったけど
有栖蓮児だ！
よろしく！」

「ああ、俺の名前は『井豪 永』だ、よろしくな」

――とこんな感じでこの藤美学園での生活が始まったのです！

終わり

第十六話ー電磁パルスー（前書き）

よし！4巻ゲッツ！

第十六話―電磁パルス―

side―蓮児―

「行くぞ！」

飛天○剣流！龍槌閃！」

「お前は何をやってるんだ」

士がかなり呆れた顔しとる！

「いや、折角刀手に入れたのでやってみたくて」

さて、戻って来たけど・・・

お、みんな揃ってるな

「やったやった♪

おもいだしたあ！」

何か先生が喜んでますが・・・？

「先生、そんなに喜んでどうしたの？」

どうでもいいけど先生が可愛い

「あ、蓮児君！

お友達の電話番号を思い出したの！」

「なるほど」

と、俺が和んでいると

「蓮児、何の話をしていたのだ？」

冴子が聞いてきました。

もちろん本当の事はいえぬぜ！

「いや何、ちょっとした世間話さ！」

「本当か・・・？」

「ほ、ホントだよ？」

嘘だっ！！！！！！！！とかないよね？

「そうか・・・」

何か悲しそうな顔をしていますか・・・
すまない！言えないんだ！

「おい、何か来たぞ？」

士が門を見ながら言う

「バス・・・ってあれはアイツらの」

紫藤達のバスだな

「麗！」

おお！？

麗がバスを見た瞬間走りだした！

・ ・ ・ ・ ・

「こちらでも大変な事はわかっています
ですからせめて

生徒達だけでも助けていただけないでしょうか？」

アイツはよくもペラペラと言えるもんだな

「無駄に胡散臭い奴だな」

士も紫藤が嫌いみたいですな！

「胡散臭さは世界一イイイイイ！！」

・・・はス○マ妖怪かな」

「ああ、確かにな」

「え？知ってんの！？」

「前に幻○郷へ行った事がある」

「マジか・・・」

二次創作ならよくあるけどリアルに行ってたなんて・・・

「ならば殺すがいい！」

うおう！？
ビックリした！

士と話してる内に話が進んでたっぽい

「その男の父親とはいくらか関わりがある！
だが今となっては無意味だ！
望むならば殺せ！」

「な・・・ッ
そんな事！」

親父さんの言うことにおばはん達が反論しようとするが

「無論！」

親父さんに睨まれて怯む

「私も必要があればそうする！！」

親父さんが格好よすぎる・・・

孝が麗の場所に走りだそうとするが冴子に止められる

「冴子さ・・・」

「・・・宮本君は自分で決めねばならない」

「・・・」

パシヤッ

士が麗と紫藤の写真を撮っている・・・

士・・・勇気あるなあ・・・

「いいでしょう・・・

殺しなさい！

私を殺して命ある限り

その事実に苦しみ続けるがいい！

それこそが教師である私が生徒のあなたに与えられる
最高の？教育？です！」

皆が固唾を飲み見守る

パシヤッ

士はまったく関係なしに今度は高城の家を撮っている

「……」

麗が銃を下ろし戻ってくる

「それが君の判断なのだな？」

「殺す価値もありませんから」

「はっはっはっ！！
それもまた良し！」

紫藤がすげえキレてるけど
まあ自分のせいだしな

「お前は去れ！」

その者たちも同じだ！
すでにくだらぬ教えに染まっている！」

親父さん達にバスへ乗せられ帰される

ざまあ W W W
って原作を読んだ時は思ったものだ・・・

「やゝれやれ
どうなるかと思っただぜ・・・」

「ていうか電話がどうの言ってなかったか？」

「ああ、そうそう！

先生！電話かけるじゃないんですか？」

「あ！忘れてた！
小室くーん！携帯！携帯！」

今更だが俺携帯学校に置き忘れて来たのよねゝ

まあいいけどな

「えーと
1がここで2がここで3がここで・・・」

人差し指でゆっくり一つずつ押して行きよる・・・

「代わりに押しましようか？」

見かねてコータが先生に言う

「分かんなくなるから
邪魔しちゃダメえ」

先生が可愛いすぎて生きるのが辛い・・・

何言ってるんだ、俺

「あーリカあ？
生きてたねー！」

お、繋がったようだな

いや、それにしても

先生が嬉しさに飛び跳ねるから・・・

先生の大きな2つのマシユマロが・・・ブルンブルンと・・・

畜生！揉みてえ！！

「蓮児」

「ん？なん・・・でございますか？冴子様？」

冴子様が何か怒ってる・・・

怒気に殺気が混じってるくらい怒ってる・・・
何で！？

「今どこを見ていた？」

「な、何の話でしょうか・・・？」

「・・・鞠川校医の胸を見ていなかったか？」

「み、見てないよ」

「・・・本当に？」

ジイイイイ・・・

「・・・・・・・・」

や、やめろ！そんな見ないで！

「み、見ていました・・・」

パシヤッ

士ああああ！！

こんな所撮るなあああああ！！

「ま、まったく君は・・・

胸が見たいのなら

い、言ってくれれば・・・」

何だろう？

冴子が手遅れな気がしてしまった・・・

そんな、事をやりっていると・・・

カッ！！

空が一瞬光った

「え？」

「もしもし!! ももし!!? リカあ?」

「おい、今の何だ?」

「ミサイルが爆発したんだよ
それにより電磁パルスがたった今起こった」

「なるほど、お前が言ってたのはこれか・・・」

「あれ？」

「な、何で？」

「壊れちゃった・・・」

「先生がカチカチと携帯をいじるが何の反応もしめさない」

「さて、ここから本格的に行かないと・・・」

「鳴滝の言葉も気になるしな・・・」

息抜きにどうぞ（前書き）

後悔はしているし反省もしている！

ツツコミはなしで（あ

息抜きにどうぞ

くもしも蓮児がプリニーになったらく

【プリニーレンジ】

罪をおかした事がないのに何故かプリニーになった。

でも持ち前のポジティブさで「まあいいや」と思っている

普通に喋れるが面白いので語尾にツスをつけて話す。

普通のプリニーとは違い体色が白い

プリニー連射は何故か『魂喰』と『ライドブッカードモード』
を大量に投げまくる

見切りも使えるままなので普通のプリニーどころか普通に悪魔より
強い

爆発はするがかなりの衝撃がないと爆発しない

ディケイドライバーは条件をみたすと使える

変身したら普通のディケイドになる

レベル1でも十分エトナと渡り合える

side—蓮児—

何この設定

何で俺がプリニーなの？

てか何でこの小説と関係ないのやってんのよ！？

「そんなの作者の都合ッス」

「何！？何でプリニーがいるんだ！？？」

「あの時はよくもオレを殴ってくれたッスね！
この恨み今晴らすッス！」

「あ、お前、あの時、ありすちゃんが持ってたプリニーか！
人形じゃなかったのか！」

「作者の都合で本物になったッス！

行くッス！くらえーッス！！」

「・・・」

ガシッ！

「へ・・・？」

ポイツ！

「投げるなんて卑怯ッスウウウー・・・！！」

ドカーン！！

「あ、ゾンビ共にプリニー落とししたら余裕じゃね？」

「やめるッス！！」

以上

何この無駄なの・・・

第十六・五話―世界を破壊するモノ達―（前書き）

めっちゃ短いですw

第十六・五話―世界を破壊するモノ達―

side―蓮児―

ゾンビ共が段々とこっちに近づいて来てるのを目視できるんだけど
さ・・・
あれって・・・

「なあ、士」

「・・・何だ？」

「俺、目悪くなったのかな？
何か明らかにゾンビじゃないのがいるように見えるんだけど」

「確かに死人以外の奴らがいるな」

「俺の目が正しければさゝ
あれってさあアンデット？」

「オルフェノクに魔化魍もいるな」

「何で？」

「コレが鳴滝の言っていた事だろ？」

「コレはあれだな・・・

本気で皆を守らんと・・・

ゾンビはともかく普通の人間が怪人を倒せるとは思えないしな・・・」

「取り合えずあのデカイ家に避難させるべきだろ？」

確かに」

このまま原作どおりに孝たちがこの家から離脱しても
もし他に怪人がいたらまず勝てんだろうしな・・・

「よし！

とりあえず皆に呼びかけないとな！」

第十七話 一 共闘 一 (前書き)

戦闘描写苦手すぎるだろ僕・・・orz

第十七話 一 共闘 一

「小室くん・・・」

ケータイ、壊れちゃった・・・

もしかしたら、あたしが壊したのかも」

ゴメンと手を合わせながら先生が謝る

「え~~~~っ」

「・・・どうかしらね」

回りは突然動かなくなったバスなどに困惑している

「まさか、こんな時に・・・」

「どうしたんですか
沙耶さん？」

高城の様子を見てコータが高城に聞く

「アンタのは関係ないはず！
いいから見張ってなさい！」

そう言い高城は麗の所へ行き

「宮本、銃のドットサイド覗いてみて」

そう聞く

「え？何で？」

「ともかく覗いて！
ドットは見える？」

高城の言うとおり
麗がドットサイドを覗く

「んっど・・・
見えない・・・」

そう聞いた瞬間
高城は高城父に

「パパ！計画を立て直さないとダメ！
これはきつと——」

計画の変更を言おうとしたが

「みんなあ！避難だ避難！
全員家の中に避難しろ！」

と、蓮児の声が聞こえた。

side—蓮児—

「みんなあ！避難だ避難！
全員家の中に避難しろ！」

そう俺が叫ぶ

あんなに怪人がいたら大変だな！

「何を言って・・・」

高城が何言ってたコイツみたいな顔しとるが

今は凹んでる暇はない！

「あれ見ろ！あれ！

明らかにゾンビじゃないのがいるだろ！」

「な、何だあれ・・・？」

コータが銃のスコープを見て驚いている

「いいか！

俺の言うとおりに家へ避難しろ！

ゾンビはともかくアレはただの人間には倒せん！」

「でも家に籠もってもあの数じゃすぐに押し入られるわ！」

高城が言うが・・・

もう隠し通す事はできんな・・・

「大丈夫！

俺と士で何とかするから！」

「何を言っているんだ蓮児！」

「心配するな冴子！

何せ俺達は正義のヒーローで仮面ライダーだからな！」

「俺は正義のヒーローになるつもりはないが」

士がゾンビ共を見ながら呟く

「つれないなあ・・・」

まあいいか！

さあ、そろそろ、Wディケイドと行くか・・・

「親父さん！ここにいるみんなを早く中へ！
行くぜ！士！」

「ああ」

俺達ディケイドドライバーを腰に付ける

「有栖君！一体何をする気だ？」

「見てればわかりますよ！」

俺達はカードを取り出し

「「変身！」」

バックルへ挿入する

【KAMEN RIDE!!】

【DECADE!!】

仮面ライダーディケイドへと変身する。

「な!？」

「何だ・・・あれ・・・？」

みんな驚いているな！
そりゃそうか！

「おお！
すげえ一緒だな！
端からみたらどっちかどっちか分からんぞ！」

「確かな・・・」

「蓮見・・・」

「冴子、危ないからみんなと一緒に避難するんだ！」

「ちょっと！」

「それ何よ！？」

高城がキレとる・・・

「仮面ライダーさ！」

あ、すいません、そんな怖い目で見ないで！

大丈夫さ、終わったら説明するから」

「・・・・・・・・ふん！」

ちゃんと説明してもらうからね！」

「OK任せろ！」

さあ、親父さん！

みんなを避難させて下さい！」

「・・・・・・・・彼の言うとおりにみなを避難させろ！」

そう言い親父さんは腰の刀を抜く

「私達は死人共の相手をする！
君達はある得体のしれぬ者達を頼む！」

親父さん・・・

やっぱりカッコ良すぎだろう！

親父さんの部下達がみんなを家の中に連れて行く

「蓮児！」

「心配無用だぜ？ 冴子！ 俺達は負けん！」

そう言い俺は向かってくるゾンビ&怪人に向き直る

「よし！ ある程度のゾンビは無視して怪人を倒そう！」

「ああ」

さて、ガチバトルの開幕だな！

【FINAL ATTACK RIDE!!】

【DE DE DE DECADE!!】

くらえ！開幕ファナルアタックライド！

俺はデイメンションブラストを発動する。

怪人には避けられたがゾンビはそこそこ倒せた

「いきなりか・・・

まあいい、行くぞ！」

士がライドブッカーをソードモードにして
ゾンビを叩き斬りながら怪人達へと走る

てかローチが結構いるな・・・

あとパルドキサアンデットとかいるけど？

あれ鎌田か？

多分違うな・・・

あとは・・・バケネコ、カップ多数に乱れ童子っぽいのがいるな

それとドラゴンオルフェノクとセンチピートオルフェノクとロブスターオルフェノクにクロコダイルオルフェノクがいる・・・

何でラッキークローバーがそろってんだよ

まあいいか

取りあえず殲滅だ！

「オラあ！」

カップを殴る！

『■■■■！！！！』

パンチを受けたが怯まず俺に攻撃を仕掛けてくる

「うおう！

テメツ！こっちはガチバトル初心者だぞ！？

手加減しろやああああ！！」

【ATTACK RIDE！！】

【RECCA DAIZANTOU！！】

俺は烈火大斬刀を呼び出しカップ（&ゾンビ）を潰し斬る！

「ハアアアア！うりゃあ！！」

烈火大斬刀から炎が溢れ出す

そしてそのまま怪人とゾンビを巻き込みながら振り回す

多数起こる爆発

「まあ初心者にはビギナーズラックってのがあるわな
誰も予想しないだろ？

烈火大斬刀を使うとか」

「はあ！

・・・お前誰に喋ってんだ？」

「読者？」

「ハア・・・

いいからやるぞ」

「何その溜め息！？

いや、まあやるけどさ！」

「しかし数が無駄に多いな・・・」

そう言い士はカードを取り出し挿入する

【ATTACK RIDE!!】

【ILLUSION!!】

おお・・・

イリュージョンが増えてそれぞれ戦いだした・・・

もはや遠目からじゃ俺がどれかわからんだろうな

《だがしかし！冴子には一発でわかるのだ！》

おお！？何か聞こえなかった！？

まあいいや

さっさと倒しましょう！

俺は烈火大斬刀を持ち直し怪人達へと走る

・
・
・
・
・
・

side—冴子—

凄い・・・

あの姿になればあれほどまでに強いのか・・・

流石だ！蓮児！

おっと、少し興奮してしまったな・・・

「す、すげえ・・・

何だよあれ・・・」

「＜奴ら＞をあんなに簡単に・・・」

「ていうかあの爆発してるのは一体・・・？」

皆驚いているな

無理もないか私も初めてあの姿を見た時は驚いた
いや、今も十分驚いているが

しかし、蓮児と一緒にいた男も蓮児と同じ姿になれるとは・・・

それに裏庭で突如現れた中年の男も気になる・・・

彼らは一体何者なのだろう？

ま、まあ何者だろうが私の蓮児への思いは変わらないがな・・・！！

うう・・・

何を言っているんだ私は・・・

第十八話―怪盗の海東―（前書き）

ちくしょう！ちくしょおおお！！（セル風に）

もう一度言おう！戦闘描写苦手すぎだろ、僕・・・

なんかもうよく分からなくなっていますww

この話でまた違う怪人が出てきます

何故か分かりませんが途中ギャグパートが入ります！

シリ阿斯を頑張ってやろうとしたのに！orz

第十八話―怪盗の海東―

side―蓮児―

【FINAL ATTACK RIDE!!】

【DE DE DE DECADE!!】

持っていた烈火大斬刀が大筒モードへとかわり五輪弾をかたどったエネルギー弾が発射され怪人とゾンビを吹き飛ばす。

「やれやれ
はっはっは!・・・多くない?」

何かゾンビ並みに沸いてるんだけど!?
どゆこと!?

その内バケガニとか出てこないだろうな・・・

てかダークローチがいるのでフォーティーンとかいたりするのか・・・?
・?

「確かに無駄に多いな
どうなってんだ？」

怪人共を迎撃しながら俺たちは話していると

「これは沸き出す元を叩かないとずっと出続けるよ」

と言う声が聞こえた

ていうか・・・

「お前！海東！

お前もこの世界にいたのか？」

「ああ、この世界のお宝を頂こうと思って、ね！」

喋りながら海東はディエンドライバーをゾンビ達に撃つ

「お宝？」

まさか、俺が持っているとかいわんだろうな・・・？」

「その通りさ、よく分かったね

君の持ってる刀を僕に渡してくれないかい？」

刀って・・・魂喰のことか！

あれってこの世界のお宝だったとは・・・

「ふん、そんな物を渡すにしろ渡さないにしろ

海東、お前も手伝え」

「しょうがないなあ、仲間のために手伝ってあげるよ」

そして海東はディエンドライバーをクルクルッと回しカードを取り出す。

【K A M E N R I D E ! !】

「変身！」

【D I - E N D ! !】

海東は仮面ライダーディエンドへと変身する。

「いいかい？この怪人達を召喚するだけの怪人がある
まずはそいつを倒そう」

「んなもん何処にいんのよ？」

「きっと近くで僕たちを見ているはずさ
ああ言う所とかに、ね！」

【ATTACK RIDE!!】

【BLAST!!】

海東が高城家の微妙な位置へディエンドブラストを発射する。

いや、そんな簡単に見つかりはしな——

「ぐわあああ!!!!!!」

「いたよ!？」

何かスゲー虚しい！」

「なるほど、あいつを叩けばいいのか」

「そういう事さ」

何なのあのあっけなさ・・・

馬鹿なの？死ぬの？とか言いたくなるわ・・・
いやマジで

「ぐううう・・・まさかこの俺が見つかってしまうとは・・・」

「お前だれだよ？」

「我が名はモールイマジン！」

うわ、イマジンもいた・・・

しかもモールイマジンで・・・

何て中途半端な・・・

どうせならアリゲーターイマジンとかでいいんじゃない？

ラッキークローバーとかパラドキサアンデットとかいるんだったら・
・

「お前、どうやって怪人共を召喚している？」

「ふん！そんな事を教えると思うか！

戦う力を失うかわりに制限なく怪人を呼べるようにスーパー大ショ
ッカーの大幹部、死神博士様に改造されたなどはな！」

「うーわ・・・思いつきり喋りやがった・・・
てかスーパー大ショッカーで・・・
ネーミングが単調すぎる・・・」

「まだショッカーは諦めてなかったのか・・・
だがじいさんは写真館にいるぞ？」

そうか死神博士は光栄次郎だったな

「フッ、奴は偽者だ！」

今は本物の死神博士様が新たな怪人達の研究をしている！」

「そうか・・・こんなにペラペラ喋ってくれるなんて思わなかった
よ、ありがとう」

海東の言葉に

「くっ！しまった！この俺がまんまと敵にハメられるとは！」

いやいや、自分で勝手に喋りましたよ？

もうやだ！こいつ出てきて一気にギャグパートになっちゃったやん！
もういいや！コイツは倒す！

【ATTACK RIDE!!】

【IMPACT!!】

俺はディケイドインパクトをモールイマジンへ叩き込む

（説明…ディケイドインパクトとは！拳にディケイドの紋章のような物を纏わせて敵を殴る技である！ガンバライドではコンプリートフォームの技）

「ぐわあああ!!!」

グッ！貴様！俺は戦う力はないのだぞ!?

そんな者を殴るとは貴様、良心はないのか!?!」

「世界征服とか企む奴らに良心もクソも無いわあ!!!」

・ ・ ・ ・ ・

side―冴子―

・ ・ ・ ・ ・

アレは一体何をしているのだ？

いきなり2人とは別の姿へ変わった奴が銃を撃った先にモグラ？の
ような変なものが現れたと思ったら・ ・ ・
一体何を・ ・ ・？

周りの得たいの知れ無い者達も何故かその間攻撃してこない・ ・ ・

本当に一体アレは何だ・ ・ ・？

・ ・ ・ ・ ・

side―孝―

蓮児達が何か分からないけどとてつもなく強い姿になって戦ってい
るけど・ ・ ・

あの変な奴が出てきて蓮児がいつもの蓮児とまったく同じになった・
・

アレは一体・ ・ ・？

・ ・ ・ ・ ・

side―麗―

アレは何？

蓮児たちのほかにまた変なものが出てきたと思ったら今度はもっと変なものが出てきたわ・・・

遠くからでも蓮児がいつもとまったく同じ蓮児に戻ってる事がわかった・・・

・
・
・
・
side―高城―

・
・
・
・
アイツには馬鹿が集まるのかしら？

・
・
・
・
side―コータ―

凄い！あの銃調べたい！

・
・
・
・
side―ありす―

うわー

かっこいいー！

・ ・ ・ ・ ・
side―蓮児―

さて、と・・・
そろそろコイツを地獄に落としましょうか・・・

「グゥ・・・
俺をここまで追い詰めるとは・・・
貴様ら・・・一体何者だ!？」

自分で戦う力ないゆうてたやん・・・

「俺は、いや、俺たちは!」

「「「通りすがりの仮面ライダーだ!」」」

「まあ、俺は通り過ぎる予定はないけどね」
てかこんな締まらん名セリフはだめだろ・・・

「はあ、コイツといると疲れる・・・
とつとと決めるぞ！」

そう士が言い

カードを取り出しバツクルへ挿入する

【FINAL ATTACK RIDE!!】

【DE DE DE DECADE!!】

士の前に10枚の3Dカードが現れる

飛び上がりカードの中を通過しモールイマジンヘデイメンションキ
ックを放つ。

「ぬぐああああ!!!」

ぐう・・・貴様ら・・・よくも・・・

俺の最後の力で様々な世界の怪人を呼んでやるうううう!!!」

モールイマジン最後大きく腕を広げ
爆発した。

その直後、オーロラのような物が現われその中から怪人が現れた。

うおお・・・

グロングにアンノウンにミラーモンスターにワームにイマジンにフ
ァンガイアが出てきた！

「やれやれ、また増やしやがって・・・」

「ここはもう一気に殲滅しましょう」

そう言い俺はケータッチを取り出す

「お前・・・ケータッチも持ってるのか・・・」

「うん、何か付いてきた」

何か仮面の下で士が呆れてるのがわかるよ
コレばかりは俺じゃないもの！

「まあいい、やるか・・・」

【【KUGA!! AGITO!! RYUKI!! FAIZ
!! BLADE!! HIBIKI!! KABUTO!! D
ENO!! KIVA!!】】

【【FINAL KAMEN RIDE!!】】

【【DECADE!!】】

俺たちはディケイドコンプリートフォームへと変わる。

「さて、行きますか！」

第十九話一終結！一（前書き）

もう、自分の思うがままに書きました！

もはや後悔はしていない！

第十九話ー終結！ー

sideー蓮児ー

降臨！Wコンプリート！

ふはははは！！

「やっぱり瓜二つだね
君達」

「いや、まあ同じデイクイドですしね」

「ふ、それじゃあ、僕も君達に合わせよう」

そう言い海東が何かを取り出す

「なっ！それは！？」

「君達だけが持ってるわけじゃないよ」

ディエンドケータッチか！

海東がカードを取り出しケータッチへ挿入する

【G4 RYUGA OGRE GUREIBU KABUKI
CAUCASUS ALC SKALL!】

【FINAL KAMEN RIDE!】

【DI-END!!】

海東はディエンドコンプリートフォームへ変化する

「お前もそれを手に入れてたのか」

「手に入れるのは苦労したけどね」

「おお、これでTコンプリートフォームじゃん」

これで勝る！

さあ行くぜ！

カチャ、ドゥーン!!

「おお!？」

カード出てきた!

何ぞこれ?

アタックライド?

えゝ何々?

アタックライド・・・コン・・・ジキ?

ん?何かどつかで聞いた事あるような?

コンジキ、コンジキ・・・?

魂、喰?

魂喰かあ!?

え?何で?

何で魂喰がアタックライドになってんの?

いや、そんなんもアタックライドにするディケイドは何者だよマジで！

よし使ってみるか

【ATTACK RIDE!!】

【KONGIKI!!】

シャシャシャ!!

おお！魂喰出てきた！

てか、かなりドス黒いオーラみたいなの出てるんですけど・・・

とりあえず振る

バシユツ!!

ドォーン!!!!!!!!!!

うおおおお!!?

斬撃が飛んだ！

何この斬○

天鎖○月みたいだな

「やっぱり、欲しい」

海東が何か言ってますが無視でゝ

「おい、あいつら屋敷に向かってるぞ」

「え、ちよっ！何でそんな余裕そうに言ってるのよ!？」

「じゃ、この姿の力を見せて上げるよ」

そう海東が言い

一枚のカードを取り出しディエンドライバーへ挿入する

【FINAL ATTACK RIDE!!】

【DE DE DE DE—END!!】

ディエンドの斜め前に三方向に3Dカードが現れ
そのエネルギー弾が通過しディメンションバスターを発動する

三方向に飛んだエネルギー弾は怪人達の頭上に落ちる

「おお・・・格好いいな・・・」

・
・
・
・
・
side—みんな—

「もう、何て言えばいいか・・・」

「そうね、何か変なのを倒したら圧倒的に怪物の数が増えたのに何
よ今の、かなり数が減ったじゃない」

「格好いいな～
特に青いのが！」

「何を言う平野君
蓮兎が一番格好いいに決まっているではないか」

「「「え？」」」

「あ、いや、その」

「お兄ちゃん達みんなかこいいよー？」

「そ、そうだな！三人共かっこいいな！」

「「「・・・」」」・

・ ・ ・ ・

side—蓮児—

「遊びは終わりだ、そろそろ決めるぞ」

士が言う

「よし！じゃあ、オールライダーで行くか！
半分出すから半分出してください」

「あ？ああ、分かった」

俺達はケータッチを取り出し紋章をタッチしていく

【RAIJINGU ULTIMATE】

【SHINING】

【SURVIVE】

【BLASTA】

【KING】

よし！残りやります！

【ARMED】

【HYPER】

【SUPER CLIMAX】

【EMPEROR】

【XTREME】

平成主役ライダー集結！

てか、クウガ・・・

うん、まあいいか！

「それじゃ僕も」

【ATTACK RIDE!!】

【GEKJYUBAN!!】

おお・・・

ディエンドがG4、リュウガ、オーガ、グレイブ、歌舞鬼、コーカサス、アーク、スカルを召喚する

何で電王のライダーがいないの？

牙王とか幽汽とか

まあ、いいか！

まあ、平成の主役、劇場版ライダーが揃いましたね

うん、めっちゃ多いね

もう何か逆にイジめてる感があるんだけど・・・
まあいいか！

「よし！行くぜ！」

【FINAL ATTACK RIDER!!】

【ALL R R RIDER!!】

【DE DE DE DE—END!!】

平成、劇場ライダー達全員でライダーキックをかます！

何でライダーキックかって？

ノリだ！

ライダー達のキックを受け怪人達が次々と爆発していく

もう何かめっちゃ爆弾落としてるみたいになっとる

「さあ、これで最後だ！」

【FINAL ATTACK RIDER!!】

【DE DE DE DECADE!!】

最後に士と俺でファイナルアタックライドを繰り出す

10人のライダーの紋章をくぐり抜けデイメンションキックを発動する

「ぐああああ!!」

ドォーン!!!!!!!!!!

「ふう・・・」

よし!終わった!」

そう言い変身を解く

「それじゃ、僕は行くよ」

「あれ?魂喰は?」

「お宝を得るのは焦らずに、さ
また来るよ」

いや、来ないでくれるとありがたいんですが・・・

「あ、親父さん達！
大丈夫でしたか！？」

「ああ、君達が戦ってくれたおかげでこちらに來た死人は少数だった」

「そうでしたか」

「俺の役目も終わったな、それじゃ俺も行くぜ」

そう言い歩き去ろうとする士

ガシッ！

「？何だ？」

士の肩を掴み引き止める

「いやいや、みんなにライダーの説明をするのにあなたは必要不可欠でしょう？」

「そんなの自分でやれ」

「無・理」

「お前な．．．」

．．．．．

そういえば

その頃のあの二人は！

「士ああああ！！

俺の出番はあああ！？」

「やっぱりついていけばよかったです．．．」

END

第二十話―鬼―（前書き）

ほほう・・・気が付けばもう30部までいったかゝ

僕が今まで書いた小説皆10部を超えることほとんど無かったのに
これは快挙だ・・・

さて、皆さんはお気付きだろうか・・・？

・海東が地味に僕また登場しますよ？フラグを立てて行ったことに・

第二十話―鬼―

side―蓮児―

「・・・・・・で？」

「え、あ、はい、その・・・・・・」

お、鬼だ・・・・鬼がいる・・・・

高城と言う名の鬼がいる・・・・
邪鬼じゃないよ？鬼だよ？

まあ一部の人くらいにしかわからんことは置いといて・・・・

もう高城が鬼の修行をせずとも鬼に覚醒しそうな勢いだな・・・・
怒気っていうか

もはや怒鬼・・・・

『おい、何でコイツはこんなにキレてるんだ？』ヒソヒソ

『さ、さあ・・・・、あれかな？変身できること黙ってたからかな？』

『そもそも俺は関係ないのに何で俺まで正座させられてるんだ』

『そ、それは本気でわからん』

などと俺と士がヒソヒソ話していたら

「死後・・・私語は慎みなさい」

「ちょっとまって!?!何か不吉なと言わなかった!?!」

怖い、さすが高城怖い・・・

「ていうかそもそも、あんた誰よ?」

「いまさらだな・・・」

そういやそうか高城たちにとっちゃいつの間にか士がいたんだもん
な・・・

「俺は『門矢 士』」

コイツと同じ『仮面ライダーディケイド』だ」

「ディケイド?」

「俺たちが今さっき変身しただろ?
アレだよ」

「ふうん、そうね、まず仮面ライダーとは何かから話してもらいましょうか？」

ふうむ・・・仮面ライダーとは何か・・・

「まあ、言うなら悪と戦う正義のヒーロー的な？」

「まあ、それが一番適当だな」

「正義のヒーロー・・・」

どこの、特撮よ・・・

まあ変身とか今の科学じゃありえない事をしてたけど・・・」

「ま、全部のライダーが正義ってわけじゃないけどな」

「そうなの？」

うんうん・・・

王蛇とか地獄兄弟とか・・・

「うん、「祭りの場所は、ここか・・・」とか「卑怯もらっきよも大好物だぜえ!!」とか」

「？」

あ、何言ってるの？みたいな顔になった・・・

「まあ、仮面ライダーがどういうのかは何となくわかったからいいとして・・・」

あんた、どうしてもっと早く変身しなかったのよ？」

「いや、それは・・・その・・・

俺でも人に怯えられるって言うのは応えるんだぜ・・・？

まあ仕方ないけどな・・・やろうと思えばすぐに世界を破壊できる
奴がそばにいるんじゃない」

「蓮児・・・」

「ま、その微妙な怖さで変身しなかった
とは行っても学校から脱出した時に変身してたがな」

「まあそうじゃなきゃあの数はいくらなんでも無謀だしね」

「うん、変身したら一瞬で片が付きました」

すげえなディケイド！

「ああ、あと、あんたは何でここに来たの？」

高城が士に言う

「この世界に来たらいきなりあの死人どもに襲われてな
生き残りを探してどうしてこんな状況になったのか聞こうと探して
る内にここにきたんだ」

「この世界・・・？」

ずいぶん自分が違う世界から来たみたいなのを言うのね」

「そのとおりだしな」

「あ、高城、士は俺と違ってマジもののディケイドだから様々な世界を渡って旅をしているんだよ」

高城が何か「は？」みたいな顔しとる

「まああれだな、ここと似て非なる世界ってやつ？まあパラレルとか・・・平行世界って奴さ」

「平行世界・・・」

そんなのが本当に存在していたの・・・」

高城が何か考え込んでますな・・・

「本当に？」

「ああ、俺たちは世界を渡ることができる」

「まあ、変身して極太ビーム撃ったり怪人出てきたりしてるんだから信じるしかないんじゃないかね？」

「そうね・・・」

あんたたち本当にむちゃくちゃね・・・

何だかこの世界で起きてることより驚いたわ・・・」

ふむふむ、なら驚きついでに・・・

「俺も実はこの世界の住人じゃなかったりするよ？」

「は？」

まあ当然な反応ですわなあ

「俺の場合は世界を越えるって言うか一回死んでこの世界に送られたんだがな」

あ、高城が何かすげえ苛立ってるのがわかるわ・・・

「あんたねえ・・・
そんな冗談は・・・」

「いや、マジですよ？」

俺トラックに跳ねられてテンプレ気味に神様にこの世界に送られたから

いやあ死後の世界は何も無いね」

まあもしかすると神域とか言うところかもしれないが・・・

「本当なの？」

「うん」

「はあ・・・」

本当に無茶苦茶だわ・・・」

盛大に溜息を付く高城さん

「あ、そうだ、俺も高城の事『沙耶』って呼んでいい?」

「ダメ」

「何で!？」

「こんな事をすぐに言わなかった罰よ! 私の事はこれまでどおり苗字で呼びなさい!」

ぐふう・・・

まさかこんな事になるなんて・・・

「えと、お話中いいですか・・・?」

「おう、コータどうした?」

コータがおずおずと言ってくる

「いや、あの怪物達と戦ってる最中に乱入してきた青い人は誰なのかなって」

ああ、ディエンドか

「アイツはコソ泥だ」

「名前は『海東 大樹』って言って『仮面ライダーディエンド』っ

てのになれるのさ

様々な世界でお宝を盗んでいく自称トレジャーハンター！
俺の魂喰もいただくよって言ってたな・・・」

「あの仮面ライダーは銃が得意そうね」

「まあそうだね、接近戦も充分できるっばいけど」

ギャレンとかも接近戦よくしてたっけな

「ふーん、あいつはあんたの仲間じゃないの？」

「たまに一緒に旅もするが、よくいなくなるからな」

まあ大方お宝を探してるんでしょうよ

「そういえば、士は最近どんな世界に行ってたんだ？」

「そうだな、幻〇郷に涼〇ハ〇ヒの世界にけい〇ん！の世界に一号の世界だな」

「うわあ、最初の三つがマジで二次創作によくあるやつじゃん・・・
何で最後だけ真面目なんだ・・・」

まあ興味もあるから色々と士に聞いてみた。

第二十一話―破壊者達の旅―（前書き）

いきなりですがアンケートします！

アンケートに答えても答えなくても別にどっちでもいいです！

1. これからの事

？もうデイクイドってバレたんだから変身しまくれればいいじゃん

？いままで通りでいい

？もはや変身しなくていい

2. 蓮児の事

？いままで通りふざけまくってていい

？ちょっと黙ってろ

？もう主人公組から離脱しろよ

3. 冴子さんの事

？押し倒せ！

？蓮児のどこがいいんだ！

？冴子は俺の嫁！

以上です

なんでこんなアンケートをしようと思ったのか自分でもわからない
ぜ！

最後の別にいらんし・・・

第二十一話―破壊者達の旅―

side―蓮児―

「はぁ・・・」

本当に色んな世界があるのね」

「くそう！俺もけい○ん！の世界に行きてえよ！！
沢庵をあの沢庵を！」

うん、何かもう説明って雰囲気じゃなくなっとなる・・・

「まあ、それは取り合えずいいとして他に何かもう隠してるような
こと無いの？」

うーん、どうでしょうー

無いかな？無いな、うん無い

「無いと思うよ」

「そう」

「ああ、このタイミングでなんだが・・・」

おや？ 冴子が何かいいたそうにしていますな・・・

「どうした？」

「実を言うと私は蓮児があのような姿になれる事をずいぶん前から知っている。」

なん・・・だと？

「え？ マジで？ いつ？」

「人目の付かぬ場所でコロコロと姿を変えていた時だ」

あの時か・・・

だれもいないと思って調子のりすぎたか・・・

「えっと・・・その事は誰かに言ったり・・・」

「していないぞ、そもそも言った所で誰も信じはしないさ」

「そうか」

「それともう一つあるのだが・・・」

「ん？」

何だろう？

まだ何かあったかな・・・？

「門矢殿と蓮児が裏庭で話していたときのことなんだが」

あれか・・・

まさか見ていたというのか！？

「あの時いきなり現れた男は一体なんだ？」

ああ・・・見られてた

「鳴滝の事か」

「あのおっさんの名前は鳴滝
ぶっちゃけよく分からん人なのよ」

「あんた、まだ話す事残ってたじゃない」

サーセン！

「まあ鳴滝に関してはディケイドを憎んでるか恨んでるか・・・まあそんなくらいしかわからんな」

「俺が世界を渡ればかならず一度はその世界に現れるな」

「軽くストーカーだな」

・
・
・
・
・
side—鳴滝—

「おのれディケイドオオオオオ！！！！！！」

・
・
・
・
・
side—蓮児—

ハッ！なんか鳴滝の叫びが聞こえたような・・・？

「何でそんなに付きまとわれてるのよ？」

「俺が世界の破壊者だからだろ」

「世界の破壊者？」

高城が眉を寄せて皺つくってますな

「ディケイドは世界の破壊者とか悪魔とか言われてるんだよ
まあ、士が旅する世界は破壊するどころか救っていつてるんだけど」

激情態の時はあれだけでも・・・

「ふーん、まあどうでもいいけどね」

どうでもいいのか・・・

「さあ、もう何か隠してる事はないわね？
合ったら打ち首ね」

「なん・・・やと？

え？冗談だよ？あれ？なんで目をそらすの？あ、マジで？
探せえええ！！何かまだ隠してるような事がないか探せええええ！！！！！！」

「・・・・・・」

パシャ！

写真撮んなああああ！！！！

なんでこういう時ばかり撮るのおおおお！？

「探せえ！この世の全てをそこに置いてきた！」

「どこの海賊王よ」

高城がこの手の突っ込みをしたと・・・！？

「ふう、まあいいか

もう多分隠してるようなことはないだろうから

それより写真撮ろうぜ！」

「あんたねえ、今聞いた事、私がパパたちに話さなきゃいけないの分かってるの？」

ああ、そういや親父さんたちにも言わんといけないのか・・・

「まあ取り合えず今は土に写真を撮ってもらおう！」

「俺が取るのか、ふん、まかせろ」

あの奇跡的なピンボケ写真が見れるのか！

楽しみだねえ！

・ ・ ・ ・ ・

その頃のあの人達

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「夏海ちゃんもこの世界じゃ俺と同じクウキかあ・・・・」

「ちよっ！私はクウキじゃありません！」

第二十二話―仮面ライダーダークウキ―（前書き）

～アンケート結果発表～

1番は？いつも通り

2番は？いつも通り

3番は？押し倒す

・・・

なんで押し倒すそんなに多いの・・・
でもキャラ的に蓮児が押し倒すのは不自然だから・・・

幻の？高城父が押し倒す

・・・

蓮児「（。ダ。）？」

（っダッ）ゴシゴシ

（；。ダ。）??

（っダッ）ゴシゴシ

（；。|,。|
ダ。）　　ホオォー!?!
「

高城父「フッ」

蓮児「Σ（。ロ。）」

蓮児「いやあああああああああ！……！」

第二十二話―仮面ライダーダークウキ―

※今回キャラ崩壊な方一名
また、あの方達がいきなり登場します。

side―蓮児―

「卍・・・解！」

「何をやってるんだお前は」

何！？見られていただと！？

「いや、魂喰持ってたらなんかやりたくなくて・・・
魂喰ノ夜叉！とか」

「そうか・・・」

「え？何その諦めたような顔？」

俺ってそんなに末期なの？

さて

うん、まああの後写真を撮って高城に「何よこのピンボケ！ヘタクソねえ」と罵られて

取り合えず自由時間入りましたゝ

高城は高城父に先ほどの事を話してるようです

俺達も行ったほうがいいんじゃない？

まあいいか・・・

・
・
・
・
・
・
side―冴子―

「パルパルパルパルパルパルパルパルパルパル・・・」

くっ！あの門矢という男！

何を蓮兎と馴れ馴れしくしているんだ！

折角の自由時間なのに！

ああ・・・大変だ、この頃出番が無かったから蓮児分が足りない・・・

ああ・・・そうかあの男を■■■せば
蓮児は私のモノに・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・ハッ!？」

私は一体何を!？」

危なかった・・・
危うく狂気へ落ちてしまう所だった・・・

・・・・・・・・
side―蓮児―

・・・多分あそこで負のオーラをかもし出してるのはきっと別世界の冴子だよ・・・

そうに違いない
その世界にはきっと綿流しの祭りとかあるんだろう

「どうした?」

「いや、何でもないっス！」

「ていうか、もう説明も終わったんなら俺は帰っていいのか？」

「ダメです」

「なんでだ」

「そういう決まりです」

「どういう事だ・・・」

まあせめて高城が戻ってくるまではいてもらおう・・・

なんせ本物のディケイドにはもう一生あえないかも知れないんだから！

ディエンドは何かちよいちよい合いそうな気がしないでもない・・・

「士あああああ！！！！！！！！！！」

うお!?

何?何!?

「っ!?! ユウスケ!?!」

「あ、クウキ!」

「何でそれを・・・って俺はクウガだ!」

何かユウスケ来た・・・

あ、夏ミカンもいる

「夏ミカンも・・・お前ら何しに来たんだ?」

「これ以上出番がないのに耐えられなくて」

「だがもう終わったぞ?

俺たちの役目は」

「え?マジ?」

「本当ですか!？」

「まあ全てがさっぱり片付きましたな」

なんか愕然としとるな・・・

そんなに出版欲しかったの・・・？

「そんな・・・やっぱり俺達はクウキなのか・・・」

「達って何ですか！

私はクウキじゃありません！」

「じゃあ、夏メロンか」

うん、自分で行っておいて何だが意味分からん・・・

「私は夏ミカンです！あ、いや夏海です！」

「じゃあ夏レモン」

「何ですかそれ！」

今決まった夏海さんの呼び方

士Ⅱ夏ミカン

海東Ⅱ夏メロン

俺Ⅱ夏レモン

もはや原型がとどめて無いな・・・

「うう・・・その内私完全に名前を忘れられそうです・・・」

「ドンマイ」

「ドンマイじゃありません！
ていうかあなた誰ですか！？」

「ああ、俺は有栖蓮児です
よろしくねっ！」

あのポーズを・・・

「は、はあ、そうですか」

「士、役目が終わったって言ってたけどどういうことだ？」

「ああ、それはな・・・」

・
・
・
・
・
・

side―冴子―

何い！また増えただと！

くう！あの女！何を蓮児と話しているんだ！

「パルパルパルパルパルパルパルパル・・・」

・・・ハッ！？

危ない危ない・・・

また殺意の波動に目覚めてしまう所だった・・・

第二十二話―仮面ライダーダークウキ―（後書き）

安心してくれ！

この冴子さんは別世界の人だ！

第二十三話―破壊者達との別れ―（前書き）

どうでもいいけどレビューってのががあるがレビューをされてる小説を見たことが無いぜ！

そうそう、Arcadiaの搜索掲示板に小説家になろうの学園默示録のSSはライタークロスばかりで正気の沙汰とは思えないとか書かれてたwww

何か軽く凹んだww

まあどうでもいいがな！

第二十三話―破壊者達との別れ―

※とりあえずここ数話は冴子さんキャラ崩壊期間です
キャラ崩壊が嫌な方がいれば速攻やめます
また、分かる人にしか分からないネタ発生

side―蓮児―

「ハァーハッハッハッハッハ！」

俺、今、上半身裸、首に赤いマフラー着用、仁王立ち、高笑い

「ハァーハッハッハッハ！」

何してんだろう俺・・・

いや何か赤いマフラーがテントの近くに落ちてたから突発的に思い
ついてやっちまったけど

何か終わった気がする。

「何をしているのだ、蓮児？」

おや、冴子が来たな・・・
かなり不思議そうにしとるぜ！

「いや、ちよつと超魔王になりきってみてた」

「超魔王・・・？」

「うん、まあアレだ・・・
そんな純粋な目で首傾げないで！
俺が悪かったから！」

畜生！冴子をモフモフしたい！
していいかな、モフモフ！

マシモフじゃないよ？モフモフだよ！

ああもう！何行ってんだ！俺！

「・・・・・・」

蓮児・・・写真を撮ってもいいか？」

キリッとした顔で言われた・・・
何で写真？

さっき撮ったよね？

「大丈夫だ！ここにカメラはあるから！」

一丸レフ！

何で持ってんの！？

「な、何で俺の写真を撮りたいの？」

「半裸の蓮児を撮り
私のオカズ・・・」

「お前ら何をやってるんだ」

士降臨！

てか待て！オカってなに？
いやオカズまでいったよね？

俺一体何に使われるんだったの！？

「チツ・・・」

ああ・・・ここ最近、冴子がおかしくなってる・・・

「さ、さて！」

うん！士！話は終わりましたか！？」

「あ、ああ」

取り合えず服着てと・・・

「お前もディケイドなんだってなく
ディケイドって2人もいたのか」

「いや、多分俺がイレギュラーなだけかと」

などと話してる内に・・・

「何よ？増えてるじゃない」

高城が親父さんとお母さんを連れてきたな

「ああ、士の旅の仲間のライダーたちだよ」

「・・・へえ」
ライダー達ねえ」

・・・何だろう・・・？

高城キレてない？

「打ち首ね」

「何で!？」

「あんたこの世界にまだ2人も仮面ライダーがいるなんて話してないじゃない!」

「しまったあああ!!!」

別に言わなくても大丈夫かなと思った結果がコレだよ!」

くそう!

ヤバイまさかこんな所に死亡フラグがあつたなんて!

「ちょ、やめろ・・・

刀を抜くな・・・!

それ以前に親父さんも刀渡すなあああ!」

ああ、やばい!死ぬ!

「クソッ、このキュアベリーがあああ!!」

「私、完璧！」とか行つてろやあああああ！！！！」

あれ？この状況で何言つてんだ俺？

中の人？中の人って何！？

「殺す」

「あ、ヤベ・・・」

ザシュッ！！！！

— B a d E N D —

バッドエンド32「中の人があ！中の人があ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・

ってなんでやねん！

危なかった・・・

何もかも終了する所だった・・・

てか32て・・・
死亡フラグ多い!!!

「待て、高城、それ以上近づけばお前の事を『高城』じゃなくて『内田』って呼ぶぞ！」

もしくは『多々良』って呼ぶぞ！

「・・・・・・・・ふう
冗談よ」

うわぁ

さっきまで超殺る気満々だったのに！

・・・・・・・・

side―孝&麗&コータ&鞠川先生&ありす&ジーク―

「・・・・・・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「楽しそうねえ」

「そうですねえ」

「本当にねえ」

「うははははは」

「？みんなどうしたのー？」

「もう、何時から僕たちはクウキになったんですかね」

「蓮児君が変身したところあたりからじゃないかしら」

「もう懐かしさすら感じるわね」

「ムフフフフ」

「コータちゃん？どうしたの？」

「わん！」

「……君たちもクウキになったのか……」

「あなたは……？」

「俺は小野寺ユウスケ

この小説だけじゃなく、ディケイド本編でもクウキだった男さ」

「そんな、本編でも……！？」

「そうさ、君たちは原作で活躍しているんだ
まだマシなほうさ」

「そうだったのね……
私達はコレでもマシだったのね！」

「そうだ！もっと自身を持つんだ！」

「よし、何かやる気出てきた！」

「みんなこんなので挫けちゃいけない！」

「よし！皆がんばるぞ！」

「「「おー!」」」

・
・
・
・
・
・
・

side―蓮児―

「あいつら何やってんだ・・・?」

「見てはいけないものだったな・・・」

「・・・・・・」

「まあいい、それじゃ俺たちは帰るぜ?」

「うむ、皆を守ってくれて感謝する」

「親父さんがお礼をいう」

「いや士はすごいね」

「親父さんの無駄に出てる威圧にも余裕の表情だ!」

「ふん、俺だけがやったわけじゃない」

「もう！士君！

すいません、ありがとうございました！」

「ああ」

もう行くのかあ

まあ、アレだ、旅頑張ってくださいねえ
そしてまた合おう！」

「ふん、ああ、じゃあな」

そう言い

士はさっさと歩き出す。

「ああもう士君！危ないですからそんなにさっさと行かないでくださいよ！

ユウスケ！置いていきますよ！」

「何！？あ！士！待てよ！」

「じゃあな」

クウキ！夏レモン！」

「俺はクウガだ！」

「私は夏メロン、いや夏ミカン、ああ違います！夏海です！」

もしかしてだが夏レモンはあだ名気に入ってたりするのか・・・？

「騒がしいわね・・・まったく」

「ふむ・・・」

本物とはコレでお別れか・・・

まあ怪盗にはコレから先ちよいちよい会いそうですがな・・・」

さて、と

そろそろこの家からも別の場所に行く必要があるだろ

さあ頑張りましょう！

外伝2―次の世界―（前書き）

やっと6巻みたよw

・ ・ ・ あさみさ あああん!!!

・ ・ ・ あさみさんは助けた方がいいのかね？

外伝2―次の世界―

Side―士達―

「やっと帰って来れました・・・」

「怖い・・・ゾンビ怖い・・・」

「いや、グロンギの方が怖いだろう？」

士がユウスケに呆れながら言う

「おまつ、士！それ本気で言ってるのか！？
グロンギはあんなにグロくないだろ！」

「ああ、ああ、分かったから、そんな顔近づけんな！」

顔を近づけながら文句を言うユウスケを引っぺがし
奥へ歩いて行く。

「次の世界へ行くんですか？」

「ああ、ここは大丈夫だろ
なんせ俺と同じディケイドがいるんだからな」

自身満々に言う

「はいはい、それじゃ行きましょうか」

「・・・・・・・・ふん」

「あ！士君、夏海！帰って来たのかい？」

お爺ちゃんが声をかける。

「ああ、爺さん、コーヒー入れてくれ」

イスに座りながら士が言う。

「あのね、家は喫茶店じゃないんだよ」

そういいながらもコーヒーを入れ始める

「さて、次の世界へ行きましょうか」

そう言いスクリーンを下ろし
次の世界へと旅立った。

・
・
・
・
・
・
・

side—蓮児—

「今思ったが・・・

一番クウキなのってお爺ちゃんとキバーラじゃね?」

「うん? どうした蓮児?」

「ああ、いやなんでもないですよ」

まあ何だ

士! また何処かで合おう!

第二十四話一なでなでの新世界一（前書き）

この作品は残念な作品か・・・

まあ、最近グダグダになって来たような気もしますが

僕自身面白ければそれでいいや！（あ

てかPVとかが

PV..407, 197アクセス

ユニーク..46, 314人

ってなってるけど

僕、これの意味あんまわかってないんだ・・・

第二十四話―なでなでの新世界―

side―蓮児―

・
・
・

今！俺は何か変なのに絡まれています！

「デメエの持ってるアレを寄越せよ！」

何なのこの人

「アレって何よ？」

「デメエがさっき怪物共と戦ってた時に変身した物だよ！」

ま、やっぱデイクイドライバーの事よね

「まったく欲しいんなら脅さないで言えばいいのに
はい、あげる」

俺はデイクイドライバーを差し出す

「・・・・・・・・」

名もなき男は疑わしいそうに見ている

「いや、大丈夫ですよ？上にあぐげた！とかしないから」

そう言う男はディケイドライバーを引つたくる

「お前バカじゃねえの？まあくれるってんなら貰ってやるよ！
ヒヒヒ！コレさえあれば・・・」

うわぁ・・・

何この人

明らかに何か企んどるやん

え？何でこんなに簡単にディケイドライバーを渡したかって？

君達はテレビ本編を見たことないのか！

テレビ本編ではディケイドドライバーはどんな風に取り出していた？

そう！

こんな風に

「どこからともなくすぐ取り出せます」

パツとね

「な、何!？」

まあ、そりゃいきなり手からなくなったらビビるわな

「ハアーハッハッハッハ!！」
残念だったな!！」

「て、テメエ!！」

男が殴りかかって来るけど
俺は微動だにしません

何故なら
後ろに鬼神がいるから

ゴッ!

「ぐあ！」

「貴様、蓮児に何をしている・・・」

冴子・・・さん？
怖いよ？

「ぐ、て、テメエ・・・」

ヒュ！ゴツ！

ゴツ！ゴツ！ゴツ！

「今、死ね！すぐ死ね！骨まで碎けろ！」

「ちよっ！やめ！死ぬ！ギャアアアアアア・・・！！！！」

・・・え？

若本？

「大丈夫だったか？」

蓮児」

「え？あ、うん」

気のせいだったか・・・

「こんな下らない事を考える輩もいるわけか」

「まあ、こういう事はあると思ってたけどね」

もつと大勢で来るかと思ったがな・・・

「うーむ、俺はお前達と別々に行動しようか・・・」

「蓮児！？」

な、何を言っているんだ！」

おおう、すげえ驚かれた！

「いや、だつてさ

近くにすぐ世界を破壊できちゃう奴がいるって怖くね？」

「そんな事はない！」

例え世界の破壊者と言う者であっても蓮児は蓮児だ！
私はお前を信じている」

・・・ちよっ！やめっ！照れる！
照れるじゃないか！

そんな真剣な顔で（てかちよい涙ぐんだ目で）
んな事言われたら！

「コホン、いや、まあ世界を破壊する気はさらさらないが
うん、まあその、ありがとう」

ナデコ、ナデコ

ハッ！？何か無意識に頭を撫でてしまった！

「む、れ、蓮児・・・」

ああ、冴子が顔を赤くして・・・

なるほど、これがナデコと言うやつか・・・

まあ俺自身ナデコの意味をあんまり理解してないがな！

まあ可愛いので続行してみる

なでなで

「ん．．．．」

なでなでなで

「ん、ふ．．．」

なでなでなでなで

「く、んう．．．ふあ．．．」

「．．．．（汗）」

なでなでなでなでなで

「んあ、く、ふああ．．．」

「・・・・・・・・（滝汗）」

ま、負けるな！俺！

「れ、蓮児・・・
も、もう・・・」

ダメだあああああ！！

「駄目だ！これ以上やったら俺、ノクターンに行っちまうからあああ
ああ！」

ダッシュ！！

「あ・・・蓮児・・・！」

・ ・ ・ ・ ・

「ふう・・・
ヤバかった・・・
なでなでの新世界に行きかけた・・・」

もう少しで「人間って面白ッ！」って言うリングゴ好きな死神に会うところだった・・・

いや、何でか知らんけども

さてと、確かバギーは電磁パルスの影響なかったよね？

見に行ってみるか・・・

第二十五話ーデコイ作戦だ!ー (前書き)

やっと原作4巻に戻れた・・・

冴子さんのキャラ崩壊期間終了
普通に帰ります

あと孝に「気づいてないのかよ!」ってツツコミが入る場面があります
がスルーで(え

第二十五話ーデコイ作戦だ!ー

sideー蓮児ー

「これからどうするの?」

鞠川先生が言う

「悪いけど

麗と僕の親探しに付き合って貰います

麗と僕の家、東署、新床第三小学校の順で!」

そう!

俺達は今バギーで高城家から離脱しています

あ、俺はオートバジンに乗ってるんだけどね

一回変身しました、はい

何故オートバジンかは・・・ノリだ!

まあ、あの後
なんやかんやあってそろそろ親探しに行こうと言う事になって今に至る。

「まもなく国道だ!!」

そう冴子が叫ぶ

ザザザザザザ!!

「おお」

ゾンビがいるわいるわ・・・

「いっぱい・・・」

「どうしろってんだよ・・・」

「当然だし!!」

高城が言う

「どうしてですか

高城さん」

コータが高城に聞く

「本当に鉄砲撃つ以外取り柄がないのね
でぶちゃん！」

〈奴ら〉は音に反応する！

そしてEMP攻撃は街中から人間とその技術が作り出していた大きな音を消し去ったワケ！！」

「あゝ

その上であんなライダー無双して爆音響かせたらこうなんのかね？」

「そう、そしてアタシたちもバギーとバイクのエンジン音を響かせている！！

おそらくこの街でただひとつのエンジン音を！」

「納得はいった

……だが、今問題になっているのはこの場をどう切り抜けるかだよ」

「ディケイドになろうか？」

「確かにその力ならばこの場をたやすく切り抜ける事ができる
だが、その力に頼り過ぎるのはよくないと思うのだ」

ふむ、まあないとは思うがディケイドの力に頼りすぎてみんなが戦

えなくなったら大変だしな・・・

「そういえば、このバギー水陸両用よね？
川に入ればいいのよ！

〈奴ら〉は水に入れないじゃない！」

麗が思い出し言うが・・・

「松戸さんに聞いたんだけど、この人数じゃ浮くかどうかアヤシイ
そうだ」

孝の言葉で降り出しに戻る。

「じゃ、また強行突破なの？」

「〈奴ら〉の数が多すぎますよ」

「じゃあ、どうするつもりよ！」

麗が叫ぶ

ゾンビ来るからあんまり叫んじゃいけません！

「・・・僕が囹になる」

「孝！何を言って・・・」

「バギーで走り回れば、この辺りの〈奴ら〉は全て引きつけられる
歩きでも危険は少ないはずだ」

「なるへー」

じゃあ、俺は孝と行こう！」

「私も同行しよう」

冴子もパーティに加わった！

「冴子も行くなら高城パーティの戦力が減るな・・・
じゃあ・・・

コイツをつけましょう」

そう言い俺は、オートバジンをバトルモードへ変える

ガシヨーン！！

「な・・・」

ふふふ、驚いてる驚いてる
まあバイクがこんななったらビビるわなあ

「じゃあオートバジン
みんなが危険な状態になったら容赦なくゾンビ先生達を攻撃してい

いから」

オートバジンは頷くと上空へ飛んで行く

まあ、歩くのに結構音でるから空飛んでた方がいいわな

「本当、無茶苦茶ね・・・
物理的に無理でしょあんな変形・・・」

「それがオートバジンです
サイドバッシャーのがもつと凄いと思うが・・・」

「はあ、もう何でもいいわ」

さいですか・・・

・
・
・
・
・

「おーおーおー」

「・・・ちょっと引きつけすぎたかな」

ゾンビがすげえたかって来たわ・・・

「ハア・・・」

君はやることがいつも極端だよ小室君」

ごめんなさいと孝が謝っているが・・・

俺、ゾンビの新たな名称を考えたんだ・・・

その名も

『オーバーキル』

あ、駄目ですかそうですか・・・

「そろそろかな？

私はいつでもいいよ」

「俺も大丈夫だ」

「行きます！」

うおお・・・

浮遊感がっ！浮遊感があああ！！

てか後ろを見ると・・・

ザパーン！

うわあい！冷てえー！

だが！

冴子が濡れて青少年わっほい！みたいな状況になってるわ

何言ってるんだ、俺

「あの、冴子さん、えっと、その・・・」

孝が面白いくらいテンパってるわ

「わ、私も女だぞ・・・」

そう言い冴子は水に濡れ透けた胸元を隠す

「いや、お嬢さんお嬢さん、あなた裸エプロンを平然とやってたよね？」

「そ、それとこれとは別だ！」

いかん・・・

冴子の恥じらいの基準がわからん・・・

「だ、だが蓮児になら・・・」

右から左へ受け流す♪

「さて、あの小島にでも行くか！」

・
・
・
・
・

「さて・・・」

目論見どおりに、いくにしろ、いかぬにしろ
一休みだな」

「ええ、交代で見張りましょう

冴子さんはとりあえず休んで・・・」

へくちっ！

・・・うん、冴子が超可愛い、くしゃみしたな・・・

「寒い？」

まあずぶ濡れだし寒いわな・・・」

「す、済まない・・・」

体が冷えてしまったようだ

しかし、荷物を持ち出す暇がなかったから・・・」

「うーむ、俺の上着は・・・濡れてたな・・・」

孝、何か服持っていない？俺も何も持って来てないわ」

「ああ、それなら・・・」

取り敢えずコレを」

ゴソゴソとタンクトップを取り出し冴子に渡す

「ありがとう」

そして脱ぎ始める冴子！

俺は・・・

ガン・・・見は出来ません！すみません！

何かいないのに高城がいるような気がして・・・

「もう、いいよ」

着替えが終わったようだな・・・

「・・・」

エロタンクトップ・・・今まさにこの言葉が一番あうな・・・

「?どこか変だろうか？」

俺的にはさっきの濡れ透けよりこっちのが恥ずかしいような・・・

ポッチ出てるし

何の?って?

自分で考えなさい!

どうでもいいが孝がかなり狼狽してるわ・・・

さて、と・・・

俺は見張りをしてましょーっと

・
・
・
・
・
・

side 一孝一

何か気まずい・・・

何か、何か話題を・・・

「あ、あの、冴子さんもやっぱり好きな人とかいたんですか？」

「いきなりだな？」

「いやあの、だって冴子さんほどなら
きつと・・・」

「私にも

・・・好きな人はいたよ」

冴子さんは言う

「いや、《いた》と言うより《いる》か・・・」

「え？」

「フハハハ！！」

ゾンビ共め！ここまでは来れまい！

もし来るなら

水に溺れて溺死しろ！」

冴子さんの瞳はそんな蓮児を見つめていた。

第二十六話 神社でー（前書き）

蓮児がゾンビに噛まれてしまうっ！ っていうの書いてみようか・・・

どんな風に生還させるかわからないから無理だの・・・

第二十六話―神社で―

side―蓮児―

あの後少し休んで再び行動しだした

でもね・・・

ゾンビさん達が多いよ・・・

もういつそのことゾンビがみんなレイ○イみたいなのだったらいいのに・・・

あ、あれキョンシーか・・・

「これでは中州に逃げ込む前と同じだぞ！」

「次の角を曲がれば分かります！」

轢きます轢きます！

ミンチになります！

あ、ちょい気分が・・・

「公園？」

「段ボールのお家を造るわけじゃないです！」

公園で思い浮かぶのが段ボールのお家て、その連想はどうなんだ孝・

バギーはそのまま公園に入り

噴水の中へダイブする

「とうっ！」

離脱！

「君は女を濡れ鼠にする趣味でもあるのか！」

また濡れたな冴子・・・せっかく服、渴いたのに・・・
俺綺麗に飛び退いたから大丈夫ですよ？

「バックパックからテープを取ってください！」

テープでハンドルを固定する。

それにより噴水から大きな音を響かせる

「なるほどな・・・」

音で引き寄せて、そのあいだに」

「逃亡するんですね
てかバギーは乗り捨てるのな」

「ああ、勿体無いけどな・・・
取り敢えずここから東側の出口から行けば近い
あと、音が響くから銃はなるべく使いたくない」

「なるへそ、OK任せろ！
行くぜ！冴子！」

「承知した！」

魂喰とライドブッカーソードモードの二刀流でゾンビ共を斬り飛ば
して行く

「破っ！
・・・お前はもう・・・死んでいた・・・」

当たり前だ

「何してるんです！冴子さん！」

孝の言葉で冴子の方を見ると・・・

子供のゾンビ？

「あ・・・」

なるほど子供だから・・・

っていかゾンビが冴子に！

「危ない！！」

俺は瞬時にライドブッカーをガンモードへ変え撃つ

「子供は好きだけど・・・
何かスマン！」

冴子に駆け寄り
冴子を抱え走る！

「孝！走れ！」

・
・
・
・

・
「うおら!!」

取り敢えず襲ってくるゾンビにヤクザキックをかまして倒す

「クソッ! 増えてきた!

「・・・」

冴子・・・

何か思い詰めてるようです

俺が所謂お姫様抱っこしてるのに無反応だもの・・・

意図してやったわけじゃないんだが・・・

「孝、取り敢えずあそこに行こう」

俺たちは神社の中へ駆け込む

「ふう・・・」

取り敢えず何とかなったか」

「冴子さん、一体どうしたんですか?」

「・・・・・・・・」

冴子・・・

うーむ・・・

「ま、あれだ今日はここで朝を待つか・・・」

・
・
・
・
・

「おっ、ロウソクめっけ」

・・・赤い・・・だど？」

あれ？ロウソクって白が普通じゃないっけ？

これはあれか？

人の体にロウを垂らすタイプの・・・

いや、俺は信じてるよ

神主さん

取り敢えず白いのもあったからそっちを使う

「暗闇で過ごさずには済みそうだな」

「そうだな」

「……なにも訪ねないのだな」

孝と喋っていると冴子が言ってくる

「……冴子さんがあんな風になるなんてよほどの理由でしょう」

「言いたくないことは言わなくていいからな」

「君達には何の意味もないことだが……
聞いて貰えるだろうか？」

過去の話か？

「……思い出してしまったのだ……
恐れを……」

冴子が語り出す

「小さな子の＜奴ら＞がいたから・・・」

「そういうわけではないのだ

中州でわたしに好きな男がいたかどうか訊いてくれたな」

「あ、あれはその！」

いつ聞いたの？

あ、俺が無駄にハイテンションでアー〇ヤーってた時かな

「いいのだ

わたしも女のつもりだ

男を好きになる事もあるよ

しかし・・・

想いを告げたことはない

告げる資格があるとは思えないのだ」

「でも、冴子さんならどんな奴だって！」

「・・・人を殺めかけていてもかね？」

うーむ・・・

「4年前・・・

夜道で男に襲われた
むろん負けはしなかった
木刀を携えていたからな
男の肩胛骨と大腿骨を叩き割ってやった

事情を知った警察は私をそのまま家に帰してくれたよ」

「でも、それは

過剰防衛かもしれないけど警察まで――――」

「……わたしを縛ってるのはそのこと自体ではない」

孝が言うが冴子の言葉で遮られる

「……楽しかったのだ」

冴子は口元を歪める

「明確な敵が得られたこと、それは悦楽そのものだった！
木刀を手にした自分が圧倒的な優位に立っているとあったあとは怯
えたふりをして男ね動きを誘い……
ためらうことなく逆襲した！」

「冴子……」

冴子がちよつと自暴自棄になりかけてる……！

「楽しかった

本当に楽しくてたまらなかった。

「……………それが真実の私、毒島冴子の本質なのだ
まともな理由もなく力に酔える私が少女そのものの真心を抱くこと
など許されると思うかね？」

「でも、僕も＜奴ら＞が出てきてから……………」

「君は後になってからだが……………
私は前からなのだよ」

「……………俺は……………なまじ力を持って余裕ぶっこいてたからな……………」

「噴水の前で気付いた

私は何も変わっていない

それどころか、ますますひどくなっている」

冴子……………

……………

・

「夜が明けた！
ふっ・・・一睡も出来なかったぜ！」

「裏から道に出てみんなのいる場所まで行こう
ここからなら歩いて20分で――」

うわぁ・・・

ゾンビさん達いっぱい・・・

「巫女ゾンビ・・・か・・・」

「・・・何だよ！？
葉鳴りの音でなのか？
もっと大きな音がないからか！？」

「全部を相手にする暇はないな
このまま走り抜けた方がよさそうだ
孝！俺と冴子で斬り開くからついて来い！
よし！行くぞ、冴子！」

だが冴子は動かない

「冴子？」

「・・・・・・・・」

昨日の事をまだ・・・

「・・・・・・・・いいか、冴子

お前がどんなに汚れていても冴子は冴子だ

例え世界中のみんなが冴子の敵になっても俺だけが味方でいてやる
だから死ぬな

いや、死なないでくれ」

「れん・・・・・・・・じ・・・・・・・・」

「俺なんかで良ければ支えてやるから

1年でも10年でもそれこそ一生でもずっと俺がお前を支えてやる」

「そ、それは、どういう・・・・」

「・・・・・・・・お前はここで死にたいのか？

俺は生きたい、ていうか死んだら高城に地獄に落とされる・・・・

天国行きに決まっても地獄に落とされるわ・・・・」

神様でも高城には勝てそうにないし・・・

いや、俺の中で高城はどれだけ悪魔になってんだ・・・

「だから生きよう

今はあの迫りくるゾンビ共を蹴散らして」

「・・・承知したよ、蓮児!!」

ありがとう冴子

冴子は怒涛の勢いでゾンビ共を蹴散らし道を作る

「凄いな・・・

俺も行くぜ!

孝!ちゃんについて来いよ!」

ライドブツカーと魂喰を抜きゾンビを斬り裂く

・
・
・
・
・
・

「蓮児、ひとつ聞きたいのだが」

「ん?」

「君は高城君のために生きるのか?」

「フ・・・」

「む、何だその顔は？」

「その事にかんしちゃ

冴子が一番分かってるだろ」

「ふ、そうだな・・・」

ふう、とうとう来たな・・・

ショッピングモール！！

頑張ろう！

超番外編一集合一（前書き）

やっちゃったぜ・・・！

こんなんやってる暇があるなら本編かけよ、と。

ちなみにこの番外編は他二作品にも掲載されております。

超番外編一集合一

とある世界、そこは大量の死人、所謂ゾンビにより滅亡の危機に瀕していた！

そんな壮絶な世界は1から5へ5から10へと様々な物語を展開しながら増えていった。

この話はその中の三つの世界の主人公達が作者と言われる理不尽な神の悪戯により出会ってしまった話です。

・
・
・
・
・
・
・

side—蓮児—

シュウウウウン

「おおー！ これはっ！？

オーロラ！

鳴滝か？」

辺りを見回す、うん、誰もいやしねえ・・・

「何だろうな・・・？」

入れてか！？

フツ、いいだろう。

入ってや「早く行きなさいよ。」るううう！？」

ちよっ！？ 高城さん？

何でっ！？ 何でそんなナチュラルにドSなんすか！

てか、何故、おぜう様だけいるんだ？

冴子とか、孝とかコータとかは？

まあ、うん、なんやかんやで潜っちゃった☆

・ ・ ・ ・ ・

side—伊里夜—

シュウウウウン

「ふえ？

何これ？」

変な灰色の何かがいきなり出てきたよ！

「バーサーカー、何かなこれ？
触れるかな？」

バーサーカーに灰色の変なものに近づいて貰って観察する。

「むうん・・・
何だろね？」

よくわかんないから、ちょっと触ってみようとしたら、いきなり変
なのが私達に近づいてきて、私達は変なものの中に入っちゃった。

・
・
・
・
・
・
・
side—白亜—

シュウウウウン

「？ 何でしょう？ これは・・・？」

この灰色の・・・オーロラ？みたいなモノは一体・・・

ん？ 何故かどこかで見たとがあるような・・・？

何でしょう？ もしかすると転生前に見たことがあったのかも知れませんね。

きつと、テレビなどで、こんな、いきなり地面から上ってくるオーロラもないでしょうに。

それはそうと・・・

「何かコレ、近づいて来てませんか？
近づいて来てますよね？」

逃げられない感じでしょうか？

後ろからも迫って来てますし。

まったく、ゾンビだけでも非日常なのにさらに変なオーロラですか・

・

そこまで貴重な体験、別にしたくないのですがね。

・

・

・

・

・

・

・

side—伊里夜—

うーん・・・

変なものの中に入っちゃったけど・・・
別に何時もと変わらないよ？

「バーサーカー、どうしょつか？」

取りあえずバーサーカーと一緒に考えてみよう！

バーサーカーと話しながら（と言ってもバーサーカーは喋らないけどね

でも、不思議とバーサーカーの言いたい事はわかるよ。）道を歩き。

私達は十字路へと差し掛かった時

「あれ？」

「え？」

「なん・・・だど？」

・ ・ ・ ・ ・

side—蓮児—

さて、ツンデレラ様に蹴り飛ばされてオーロラ潜っちゃったが、別
に変わらねえ・・・

強いて言うならゾンビ共が見当たらんって事か・・・

さてさて蛇が出るか蛇がでるか・・・

あれ？ どっちも同じじゃん・・・

どっちみち危険ってか？

ま、まあ、デイケイドライバーは取り出せるし、大丈夫・・・だよ
ね？

結構不安ですが何か？

まあ、そんなこんなで歩いていると十字路に差し掛かった。

「なん・・・だど？」

「あれ？」

「え？」

・
・
・
・
・
・

・
side—白亜—

さて、オーロラに飲み込まれたのはいいですが、景色が変わらないのは気のせいですかね？

まあ、何もないならそれでいいんですがね。

もしもの時の為にフル装備ですが。

取りあえず

毒島さん達と合流しましょうか・・・

というか、何故私は皆さんと離れているんでしょう？

何か陰謀を感じます・・・。

などと考えながら歩いていると十字路に差し掛かり・・・

「え？」

「あれ？」

「なん・・・だと？」

・
・
・
・
・

・
「お兄ちゃんとお姉ちゃん、誰？」

「いや、君こそ誰だよ
はっはっはっ！ 何でバーサーカー！？」

「バーサーカー・・・」

どこかで見たことがあるような・・・？

やはり転生前でしょうか？

というか何で私はこんなに冷静なんでしょう？」・

・
・
・
・

side—蓮児—

うおーい！

何でバーサーカー！？ 何でバーサーカー！？
大事な事なので二回言いました。

じゃなくて、え？ 何？ 実はFateの世界だったの？

いや、ならあそこにいる何か無駄にカッコいい弱音ハクは何だ？

・・・何だ夢か・・・

side—伊里夜—

お兄ちゃんが何だか面白い顔をしてたから眺めていたら

バーサーカーがいきなりお兄ちゃんに攻撃した。

「バーサーカー！？　どうしたの！？　何で・・・！」

どうして攻撃したのかバーサーカーに聞こうとしたら

「変身！」

そんな言葉が聞こえた。

お兄ちゃんの方を見るとカードを腰の変なものに入れて、姿が変わっていた。

「へ、変身だあ！」

ディ、ディケイドだあ！」

わあゝ、凄い凄い！

仮面ライダーって本当にいたんだあ！

あ、じゃあバーサーカーがお兄ちゃんに攻撃したのって・・・

「・・・・・・・・」

「分かったよバーサーカー！　頑張って怪人役をやろう！」

「・・・・・・・・Σ（。□。；）」

・ ・ ・ ・ ・

side—白亜—

「最近現れた新しい力だ!」

【KAMEN RIDE!!】

【OOO!!】

「わぁっ!?

オーズだっ! よーし、やっちゃえ! バーサーカー!」

「■■■■■■——!!!!!!」

・・・何ですか、コレ?

何故か唐突に始まった、妖怪大戦争。

私、完全に置いてけぼりですね。

まあ、あんなのに銃やらなにやら効かなそうですし、いいんですけど。

「そおい!!」

【FORM RIDE!!】

【GATAKIRIBA!!】

おや、緑色に変わりましたね。

ていうかインパクト強すぎで思い出しましたよ。

あれ、転生前にたまに見ていた仮面ライダーですね。

あのオーロラも多分仮面ライダーで登場してたモノでしょう。

まあ、それはさておき、この超バトルを見るのはなかなか楽しいですが私は何時帰れるんでしょうか？

こういうのって決まって何かありますよね？

例えば・・・あの何の変哲もない場所とかに・・・

ビシュッ!! (スリングショット音)

「ぐわっ!!」

「ふおお!? ホントにいた!?」

「くっ・・・おのれ、ディケイドおおお!!」

シュウウウウン

あ、どこかへ行ってしまいましたね。

一体何だったのでしょうか？

おや？ また、あのオーロラが・・・

「今度は速っ・・・」

言葉を言い終わる前に白亜はオーロラに飲まれた。

・
・
・
・
・
・

side—蓮児—

俺とバーサーカーがバトルを繰り返している最中にまたオーロラが現れた。

「何っ!? いま良いところなのに!？」

そんな声もむなく蓮児は元の世界へと強制送還されました。

・ ・ ・

sideー伊里夜ー

「行け行け！ バーサーカー！ ってあれ？」

また、あの変なのが出てきた！

ずんずん近づいて来てる・・・

よく見るとお兄ちゃんの方にも出てるみたい。

まだバーサーカーとディケイドの戦い見たかったんだけどなあ

ま、仕方ないよね！

そして、伊里夜達も元の世界へと帰った。

・ ・ ・

sideー白亜ー

「結局何だったんでしょうか？」

やはり、あの変なおじさんが鍵みたいなモノだったんでしょうか？」

なんとまあ、呆気なかったですね・・・

まあ、帰れましたしよしとしますか。

そもそも、私のいる意味は一体なんだったんでしょうね。

・ ・ ・ ・ ・

side—伊里夜—

「あゝ、楽しかったねゝ
バーサーカー。」

でも、どうして、ディケイドがいたのかなあ？

変身してた人も違うよねえ？

・ 「んゝ、ま、いっか！」

・ ・ ・ ・

side—蓮児—

まあ、なんやかんやでバーサーカーと戦って帰ってきたが・・・

「結局何だったわけ？」

・
まあ、オーロラを通ったからあそこは別の世界だったんだろうが・

何故、バーサーカー？

あと、カッコいい弱音ハクもいたし・・・

本当になんだったんだ・・・

いや、まあ面白かったからいいけどさ

・
ハクさんとも話たらよかったかな・・・

・
side—皆さん—

「でも、まあ総合的に言えば」

「「結局何だったの（でしょう）？」」

—END—

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2707m/>

学園黙示録 HIGHSCHOOL OF THE DEAD—仮面ライダーで転生者な主人公—

2010年10月18日12時12分発行